Vol.3
ANNUAL REPORT
京都造形芸術大学 共同利用・共同研究拠点 アニュアルレポート

みえてきた「舞台創造〈ファクトリー〉を内包した舞台芸術研究〈ラボラトリー〉」

「舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点」代表
京都造形芸術大学舞台芸術研究センター所長／能楽研究
天野　文雄

この拠点が置かれている京都造形芸術大学舞台芸術研究センターに勤務する筆者は、公の場で所属を「舞台芸術センター」と紹介されたことが何度かあります。もちろん、そのつど「舞台芸術研究センターです」と、やんわりと訂正しているのですが、「舞台芸術センター」と「舞台芸術研究センター」では、いうまでもなく大きな違いがあります。もっとも、「舞台芸術研究センター」は字義としては「舞台芸術を研究するセンター」ですが、この場合の「研究」にはもちろん多様な「かたち」がありうるわけで、われわれのセンターでいえば、それは2001年の設立以来、「舞台創造〈ファクトリー〉を内包した舞台芸術研究〈ラボラトリー〉」あるいは「舞台創造〈ファクトリー〉を最終目標とした舞台芸術研究〈ラボラトリー〉」であったと、いちおうは言えます。

「いちおう」というのは、その理念は理念として、実践においては模索の時期が長かったからにほかなりません。それが、2013年度に文部科学省共同利用・共同研究拠点の認定を受け、このたび3年間のスタートアップ支援のもとでの「テーマ研究課題」「公募研究課題」あわせて19のプロジェクトを進めるなかで、徐々に右のような明確な理念達成のための方法論が醸成されてきたのでした。換言すれば、「舞台創造〈ファクトリー〉を内包した舞台芸術研究〈ラボラトリー〉」という理念は、この3年間の研究活動を通じて自覚されてきたということになります。もとより、これはわれわれのいわば「感触」であって、客観的に提示したり、ましてや数値で示せる性質のものではありませんが、やや予想外ながら、なにものにも代えがたい貴重な成果であったと思います。

もっとも、「感触」とはいえ、この成果は、2014年の能ジャンクション『葵上』マルチメディア・パフォーマンス『二重の影』、2015年の『ゼロ・アワー：東京ローズ最後のテープ』『原色衝動』『ミステリヤ・ブッフ』『三人の女』のような「創造」につながり、このうちの3本は拠点外でも再演され、この12月には本拠点の実験上演を経た本邦初の『繻子の靴』全曲版が春秋座で上演される予定であることを思えば、もはや「感触」にとどまるものではないとも言えるのです。

夏の終わりに文部科学省から届いた中間評価は、さいわいにして以上のような本拠点の理念が理解され、今後の活動に期待するというものでした。これで自信をもって、緒についた「舞台創造〈ファクトリー〉を内包した舞台芸術研究〈ラボラトリー〉」を進めることができそうで、あらためて意を強くしているところです。

目　次

■テーマ研究Ⅰ
クローデル『繻子の靴』上演のための実践的研究　p.2-3
■テーマ研究Ⅱ
ダンスの創造的行為をめぐって　p.4-5
■テーマ研究Ⅲ
セノグラフィーの歴史アーカイブ構想　p.6-7
■テーマ研究Ⅳ
アジアの大学における演劇教育
――劇場を活用した舞台教育の方法論的探究　p.8-9
□公募研究Ⅰ
「ダンス2.0」の環境構築を通して
今日的課題へとダンスをつなぐ試み　p.10-11
□公募研究Ⅱ
マヤコフスキー研究
～詩人の仕事の解明と新しい演劇言語の開発　p.12-13
□公募研究Ⅲ
想起の空間としての劇場　p.14-15
◆ 2013年度～2015年度　外部評価　p.16-19
◆ 作品化に結びついた研究　p.20-23

※「研究組織」欄の肩書きは、平成27年度当時に統一した。

テーマ研究 I

クローデル『繻子の靴』上演のための実践的研究

演出家／京都造形芸術大学客員教授
京都造形芸術大学舞台芸術研究センター主任研究員 渡邊 守章

概要

本研究プロジェクトは、平成25年度に本研究拠点において実施したテーマ研究「近代日本語における〈声〉と〈語り〉」（研究代表者：渡邊守章）での研究成果と、その研究コーパスを「翻訳戯曲」へ移して、翌26年度に実施した「クローデル作『繻子の靴』上演のための実践的研究」（研究代表者：渡邊守章）にシフトした、「舞台上演における日本語創造の作業の成果・反省」を、「近代日本語」を用いた舞台作品の一つの頂点であるポール・クローデル作『繻子の靴』（初版1929年）の「舞台上演」が要求する「多面的作業」を、《言語》、《身体》、《マルチメディア映像》、《機能的であるとともに意味を発生しうる「装置」》といった、創造的要請の場に投げ出すことによって、《現実の舞台》として出現させようとする実験である。そもそも、二十世紀フランスの最大の「劇詩人」ポール・クローデル（1868-1955）の「長短入り混じった独特の自由詩形」で書かれた戯曲は、それらの台詞を発し、演じる俳優に、「全的な投企」を要求するものであり、そのために、「如何にクローデルの詩句を発するのか」という《基本的な問い》が、まさに《根底的な作業》となる。従って、クローデルの自由詩形韻文の「身体性」そのものを、根底的かつ多面的に捉え返した「日本語版」が、先ずは必要であり、本研究プロジェクトの代表者である渡邊は、2005年に、『繻子の靴』の全訳を、詳細なテキスト分析と解釈を付して、岩波文庫二冊本として刊行しており、同年の毎日出版文化賞、日本翻訳家協会賞、日仏翻訳文学賞を受けている。フランス語韻文劇の伝統を乗り越えることを目指したこの実験的長編戯曲を、現代日本語によって劇場で上演するには、どのような知的・身体的了解と、どのような他領域の参加が必要かつ可能であるのかを、多面的かつ集中的に「舞台の事件」とする必要がある。そのような「総合的実験室演劇」の手掛かりとして、渡邊は既に2008年に春秋座において、俳優の表現を台詞とその身体的動機に特化する「オラトリオ形式」として抜粋上演を行っている。

従って、今回のラボラトリー作業は、単なる「オラトリオ形式による全曲上演」に留まるべきではないが、同時に、通常予想される「身体技」を含む《演技》を、必要に応じて挿入する類のものであってもならないはずであった。この《変換》を可能ならしめる作業を受け持つのが、高谷史郎による「マルチメディア映像の参加」である。しかし高谷自身、これほど膨大な「言葉の演劇」に向かい合ったことはなかったし、長編戯曲のある特別な情景だけに彼の作り出す《映像》が、装飾的に加わるといった形での参加では意味がないことも、作業の早い時点から、共有されていた。ただ、今回、期待されている「マルチメディア映像の参加」が、具体的にどのような形を取り、どのような作用を担うのかは、前年度の「劇場実験」などでも、積極的な解を得るには至らなかった。

従って、第二年次の課題は、一方で、そのまま上演すれば12時間はかかる超長編戯曲を、重要な局面を抜いたり、分かりやすさを口実に、凡庸な「ダイジェスト版」を作ったりすると言う、安易なアプローチを排除すると同時に、作品の最も本質的な要素・局面はしっかり捉え返すという「テキスト・レジ」の作業が、俳優の身体性や生理まで計算しつつ行われねばならなかった。演出部を構成する木ノ下裕一と岩﨑小枝子の献身的な協力によって、「本読み」稽古と連動しつつ、この作業に膨大な時間を費やすと同時に、前年度の「劇場実験」が、この戯曲の「演出的発想」に見られる「歌舞伎的要素」が、そのままでは機能しないことを確認したのであるから、「演戯の空間」そのものを、「映像」との関係で決定していくことが、緊急の課題となった。

映像作家高谷と演出家が模索したのも、まさにそのような「舞台イマージュ生成の仕掛けとなる装置」なのであり、最終的には《演技》のための《装置》であると同時に、《映像》のための《スクリーン》でもあり得るような《三段構造の舞台》が導き出された。高谷の側では、《三段構造》の《蹴込》の高さを「2メートル」とし、そこに映像を投影するスクリーンの役割を付与する。そうすることで、《演技場》が、平土間を含めて3層に展開し得るわけである。

この『三層構造』の舞台は、実はクローデルが、ブラジル公使時代に、巡業に来たニジンスキーを観て感動し、彼のために書いたバレエ台本『男と欲望』で発想されていた『三層の装置』をヒントにしている。これは、クローデルが日本大使として着任する直前に、パリでスウェーデン・バレエによって上演された時に、実際に組み立てられた装置である。三段の階段の「踏み面」はほとんど見えないのに対して、それぞれ高さが2メートルと想定されている《蹴込》は、高谷メディアのためには、格好のスクリーンとして機能するわけである。

こうした《仕掛け》の効果や妥当性は、そこに「生身の人間がいる」のであるから、単なるコンピューター上の計算では解決しない。まさに、《劇場実験》によってしか実験・確認の出来ない類の《装置》なのであった。

2015年度は、演劇集団円で、渡邊演出の常連であった俳優に、京都造形芸術大学舞台芸術学科での渡邊クラスの卒業生や、京都在住の若い俳優をオーディションで集め、前記のテクノロジー的実験と、俳優の演技とがどのように共鳴しあうかを、実際の舞台で確認することを主眼とした。

第１回研究会（非公開）

テーマ：「稽古１、本読み、テキスト・レジ」
日　時：平成27年６月１日（月）- ５日（金）13:00-19:00
会　場：京都芸術劇場　楽屋２
参加者：渡邊守章、岩﨑小枝子、千代花奈、鶴坂奈央、永井茉梨奈、山本善之、片山将磨
内　容：前年度と異なり今年度は、昨年の成果が評価されたのか、比較的多くの男性俳優が参加してくれた。そのお陰で、演出家の「読み」に従ってテキスト・レジをする作業が捗った。とはいえ、この膨大な「四部作」とも言うべき作品を、日本の観客の受容能力の範囲でどこまで活かすのかは、先ずは声に出して読んでみなければわからないから、「読み」の稽古は重要である。参加者が、全て、かつて本学舞台芸術学科の「渡邊クラス」で、実習をしているから、発声や滑舌、台詞の「読み」についての基本的な了解は持っている。しかし、クローデルのような「難物」に出会うのは初めてであるから、ほとんど口移しのようにして、「クローデルの台詞」の《身体性》を納得させなければならない。その作業が、テキスト・レジに先立って、まずはあった。

第２回研究会（非公開）

テーマ：「稽古２、本読み」
日　時：平成27年７月22日（水）- 28日（火）13:00-19:00
会　場：京都芸術劇場　春秋座
参加者：渡邊守章、高谷史郎、夏目雅也、原摩利彦、古舘健、岩﨑小枝子、小田豊、千代花奈、鶴坂奈央、永井茉梨奈、山本善之、片山将磨
内容：第１回に引き続き、「読み」の稽古である。それをスタッフの人々にも聞いてもらって、通常の、あるいは通念的な戯曲とのちがいや、その「強さ」を理解してもらう。今回から、元早稲田小劇場の、小田豊氏が参加してくれたのは、心強かった。と言うのも、彼は、渡邊演出に屡々出演している（ジュネ『バルコン』の警視総監役、等）から、方法はよく分かっている。それと、今年度の参加者には、茂山家で狂言を習っている男性がいるから、これも心強い。特に、茂山家の人々が稽古に参加するのは、ずっと遅れる予定であるから、なおさらである。

公開稽古の様子　撮影：清水俊洋

第３回研究会（非公開）

テーマ：「録音」
日　時：平成 27 年 8 月 3 日（月）- 4 日（火）13:00-20:00
会　場：京都造形芸術大学　映画学科スタジオ
参加者：渡邊守章、高谷史郎、原摩利彦
内　容：渡邊演出では、常に、演出家がまず「本読み」をする。しかし、クローデルにせよ、ラシーヌ、ジュネにせよ、日常語とは異質の言語で書かれているのだから、その異形な「言語態」を、体感しておくことは不可欠である。この『繻子の靴』のように、台詞の「言語態」が、通常の散文戯曲とも、定型韻文劇とも違う「息」の体験と実践を前提にしている作品では、全体の時間配分を見るためにも、それは有効なはずである。と言う訳で、演出家は、『繻子の靴』全曲を、一人で読んで、それを録音すると言う暴挙にも等しいこと（8 時間かかった）を、敢てやってみた。二日掛かりであったが、参加者の出席が、必然的にばらばらになる作業では、演出家の「本読み」は、やはり有効なはずである。参加者全員に、スタッフも含めて、録音をカセット・テープで送って聞いてもらっている。

第４回研究会（非公開）

テーマ：「稽古 3、本読み」
日　時：平成 27 年 10 月 19 日（月）- 27 日（火）14:00-20:00
会　場：京都芸術劇場　楽屋 2
参加者：渡邊守章、高谷史郎、岩﨑小枝子、千代花奈、鶴坂奈央、永井茉梨奈、山本善之、片山将磨、木ノ下裕一、吉見一豊、石井英明、瑞木健太郎
内　容：今回から、演劇集団円で、渡邊演出に参加したことの多い俳優三氏が、稽古に加わってくれた。今回のように、「長い稽古」にもかかわらず、渡邊自身が演劇集団円の演出家でもあるから、相当な無理を聞いてもらった。特に、吉見一豊のドン・カミーユは、以前の「朗読オラトリオ」版の時も見事であったし、今回も全体を引っ張ってくれている。こうしたプロの俳優たちと、対等な立場で稽古が出来ると言うのは、若い俳優にとっても、大変刺激になると、みな語っていた。「本読み」を続けつつ、テキスト・レジの作業も進める。また、映像の高谷氏には、新しい「座組」の調子を捉まえてもらうためにも、稽古に立ちあってもらった。併せて高谷氏と、舞台上の「映像」制作の実際についての議論も続ける。

第５回研究会（非公開）

テーマ：「稽古 4」
日　時：平成 27 年 10 月 28 日（水）- 31 日（土）14:00-21:00
会　場：京都芸術劇場　春秋座
参加者：渡邊守章、岩﨑小枝子、千代花奈、鶴坂奈央、永井茉梨奈、山本善之、片山将磨、高谷史郎、吉見一豊、石井英明、瑞木健太郎、阿部一徳、木ノ下裕一、古舘健、三谷正、原摩利彦、夏目雅也、小坂部恵次、服部基、茂山逸平
内　容：今年度の計画の重要な柱の一つは、「高谷映像」の「出し方」であり、また「作り方」であったから、春秋座の舞台が使えるこの時期に、冒頭で書いた「三段組み、蹴込部分スクリーン」という「装置・仕掛け」を、実際に春秋座の舞台に立ち上げて、そこで役者を動かしてみた。これは、「劇場実験」を謳っている以上、当然の作業であるが、春秋座自体の稼働率が高いことと、出演者やスタッフとのスケジュール調整が難しいことなどで、ここまでずれ込んだ。なお、この日から、静岡芸術劇場で、宮城聰の舞台には欠かせない阿部一徳氏が参加してくれたことで、男性陣の重要な部分はそろった。後は「茂山軍団」の参加を待つばかりである。

劇場実験（公開）

テーマ：「『繻子の靴』公開稽古」
日　時：平成 27 年 11 月 1 日（日）14:00-16:00
会　場：京都芸術劇場　春秋座
参加者：渡邊守章、岩﨑小枝子、千代花奈、鶴坂奈央、永井茉梨奈、山本善之、片山将磨、高谷史郎、吉見一豊、石井英明、瑞木健太郎、阿部一徳、木ノ下裕一、古舘健、三谷正、原摩利彦、夏目雅也、小坂部恵次
一般参加者数：76 名
内　容：この実験の一つの要請として、研究成果を一般に公開することがある。これは、「劇場実験」の段階に入らないと、あまり意味がないだろうから、劇場実験の最終日に行った。「高谷映像」も、「原摩利彦音楽」も未調整ではあったが、「日本語による『繻子の靴』全曲上演」の企てが、どのような方向に進むのかは、かなりの点まで当たりが付いてきたと言える。

公開稽古の様子　撮影：清水俊洋

以後の作業（非公開）

「本読み」から、装置を入れた「あら立ち」まで、稽古をして、「受容」の観点からすると、「戯曲の異常な長さ」が、やはり問題となった。そのため、11 月以降、翌年 3 月までの「演出部」の作業は、2 年間の実験を踏まえたうえでの「テキスト・レジ」の見直しに集中した。木ノ下が自分の劇団の巡業で参加できなかったので、同じく演出助手の岩﨑と渡邊とで、テキストの「刈り込み」の作業を続けた。その際、従来の上演用台本なども参考にしつつ、「四日目」の「途方もない道化芝居」を、1950 年代の「不条理劇」の驚くべき「先取り」としてどのように活かすかが、課題となった。「四日目」の「道化芝居」は、狂言方の茂山家の人々に活躍してもらう情景が多いので、具体的な演出上の課題は、先送りとなった。

「口上役」を野村萬斎氏に「映像出演」と言う形で参加をお願いし、承諾された。

公演は 2016 年 12 月 10 日、11 日の 2 日間を予定しているが、それは、やはり現在の日本で、休憩を入れてではあれ、全 9 時間半の舞台を、どれだけの人が観に来てくれるかについての、現場的判断があるからであって、少なくともその舞台は、鑑賞に耐える形で「映像」に記録して、2 年後に来る、クローデル生誕 150 年記念の年に、公開するようにしたい。その時期に、舞台の再演が出来ればそれに越したことはない。

研究組織

研究代表者：
渡邊守章（演出家／京都造形芸術大学客員教授）
共同研究者：
高谷史郎（マルチメディアアーティスト／ダムタイプ代表）
服部基（照明デザイナー）
木ノ下裕一（演出家／木ノ下歌舞伎主宰）
研究協力者：
根岸徹郎（専修大学教授／フランス演劇研究）
小坂部恵次（舞台監督）
原摩利彦（音楽家）
夏目雅也（舞台監督）
古舘健（映像プログラミング）
吉見一豊（俳優／演劇集団 円）
石井英明（俳優／演劇集団 円）
瑞木健太郎（俳優／演劇集団 円）
小田豊（俳優　フリー）
阿部一徳（俳優／ SPAC －静岡県舞台芸術センター）
鶴坂奈央（俳優）
千代花奈（俳優）
永井茉梨奈（俳優）
山本善之（俳優）
片山将磨（俳優）
岩﨑小枝子（俳優）

テーマ研究 II

ダンスの創造的行為をめぐって

京都造形芸術大学舞台芸術研究センター主任研究員／舞踊家 山田 せつ子

研究会の具体的方法と概要

西洋、東洋を問わず、ダンスの創作の場で身体から身体へムーブメントを移す「振付」という作業は、ダンスの基本的スタイルとして長く行われてきた。しかし、昨今コンテンポラリーダンスの流れの中で、振付という行為への新たな視点が模索されてきている。「ダンス」と「演劇」が境界を越えて作品創りをし、また、美術、映像、音楽など様々なジャンルの横断的なコラボレーション作品が当たり前に行われるようになっている現在、本研究プロジェクトでは、新たなダンス創造の場を開いて行く視点を探るべく、あらためて振付の意味を実践的に問い直すことを目標とした。

コンテンポラリーダンスの川口隆夫氏は、すでに故人である舞踏家大野一雄の作品を再現することを継続的におこなってきた。記録映像を基にし、残された大野一雄の言葉、書籍、更に作品に携わった人々へのインタヴューなどを通して振付を掘り起こす作業は、『大野一雄について』という作品に結実した。この作業は現在も継続中である。また、若手ダンサー／コレオグラファー、批評家4名によるレクチャー／シンポジウムは、振付家の言葉だけをテキストにしてダンスを作り出す作業や、ダンサーと振付家との対話によっておこなう作業、批評家のみずからの身体表現を通しての思考など、多角的な視点が紹介され、それぞれの映像の紹介や、レクチャーを通して研究を深めた。その過程で、この研究自体が身体を、あるいは言葉と身体の関係をどう捉えていくのかということ、さらには人と人のコミュニケーション、そこに生まれる互いの力のバランス、権力性など、作品創造の場に生まれる様な問題が浮上する機会となった。

研究会 1（公開）

テーマ：「振付という行為〜形を移す・イメージを移す」

パフォーマンス
川口隆夫ダンスソロ『大野一雄について』

日　時：平成 27 年 11 月 28 日（土）14:00-17:00
会　場：京都芸術劇場春秋座舞台裏、春秋座舞台上
参加者：山田せつ子、森山直人、川口隆夫、飯名尚人、きたまり、相模友士郎、平原慎太郎、國吉和子
一般参加者数：131 名

東京を拠点に、世界各地で公演活動を展開しているダンサー／コレオグラファーの川口隆夫氏は、大野一雄の DVD（＝映像記録）や、稽古の言葉をひもとき、また故人を知る人へのインタヴューを重ねて、大野一雄の舞踏へのアプローチを深めた。そのような過程を経て、大野一雄の舞踏作品から独自に振付を起こし、『大野一雄について』（ドラマトゥルク：飯名尚人／2013 年 8 月、東京で世界初演）という作品を創作し、国内外で高い評価を得てきた。今回新しく追加されたパートを含むこの作品を〈テキスト〉とし、「劇場実験」として実際に上演を行った。上記作品を通じて浮かび上がってきた論点は、以下の通りであった。

川口隆夫氏の大野一雄の舞踏を象徴する作品『ラ・アルヘンチーナ頌』（1977 年初演）の冒頭のシーンへのアプローチは、「形」を移すという方法ではなく、「イメージ」を移すという方法で行っていた。今回の劇場実験では、大学構内から収集した「ゴミ」を春秋座舞台裏に散乱させ、観客が（立ち見という形で）自由に動きながら観る、という場面を創作し、「ゴミ＝醜悪なもの」の中から立ち上がる独自の美的な世界を提示した。そのダンスは、大野一雄のオリジナルの舞踏作品とはまったく異なっているにもかかわらず、大野一雄が体現してみせた「ディヴィーヌ」（＝ 20 世紀フランスの作家ジャン・ジュネ（1910 − 1985）が描いた象徴的な登場人物）を瑞々しく想起させるものであった。

冒頭場面の後、川口隆夫氏はみずから観客を本舞台に誘導し、独自に振り起こしをした大野一雄の幾つかの作品の部分パートを踊った。そこに現れてきたものは、正確に大野一雄の振りを踊ってみせることを通じて大野一雄の舞踏を観客に想起させ、不在の大野一雄自身との（まるでデュエットをしているかのような）二重性をイメージするものだった。

いわゆる万人に共通可能な「メソッド」を用いた「振付」ではなく、ひとりの人間の存在性の中で、大野一雄の舞踏にアプローチする行為としての「振付」の芸術的意味を明らかにすることができた。川口隆夫氏のダンスと大野一雄の舞踏の「距離」を明確にし、客観的に、振付というものへの問い、あるいは可能性を拡げてみせた時間だった。

※上演作品／『ラ・アルヘンチーナ頌』『死海』『私のお母さん』他

劇場実験の終了後、大野一雄の舞台を見続けてきた、舞踊批評の國吉和子氏から、作品創作の動機、あるいは創作過程への鋭い質問がなされ、川口隆夫氏との 1 時間にわたる対話を行った。「舞踏譜」として残されていない、あるいは整理された「メソッド」として残されていない先達のダンスから、何を汲み取り、ダンスとして再現していくことができるか、そのことが未来へ導く水路はどのようなものか、実り多い対談となった。

撮影：松見拓也

撮影：松見拓也

展示（公開）
大野一雄アーカイブ

日　時：平成 27 年 11 月 26 日（木）- 29 日（日）11:00-18:00
会　場：京都芸術劇場　春秋座ホワイエ
参加者：山田せつ子、森山直人、國吉和子、星野太、川口隆夫、飯名尚人、きたまり、相模友士郎、平原慎太郎、溝端俊夫、溝端美奈
一般参加者数：153 名

大野一雄公演ポスター、稽古の言葉の直筆、書籍等の展示。稽古風景、作品の DVD 上映も行う。

※関連企画～大野慶人ワークショップ
日　時：11 月 28 日（土）18:00-22:00
会　場：京都芸術センター講堂

ラウンドテーブル（公開）
振付けの可能性を巡って

日　時：平成 27 年 11 月 29 日（日）13:00-18:00
会　場：京都造形芸術大学　人間館 NA402 教室
パネリスト：きたまり、平原慎太郎、相模友士郎、星野太
ファシリーター：山田せつ子
一般参加者数：41 名

4 名のパネリストがそれぞれの作品映像を公開し、さらにそれぞれの作品の創作方法、それに伴う振付方法についてプレゼンテーションをおこなった。ダンサー／コレオグラファーである、きたまり氏、平原慎太郎氏と、演出家としてダンスへのアプローチを考える相模友士郎氏、哲学を研究しながら、自分自身も踊ることを通じて、ダンス論、身体論を展開する星野太氏の 4 名の 5 時間にわたるラウンドテーブルで、まったく異なった振付へのアプローチが紹介され、単にダンスの問題としてのみでなく、創作の現場での振付家、演出家とダンサーとの間に生じる「権力」の問題にまで発展して討論された。

若い世代が、独自の世界観で創造の場を創りだしていることや、また閉塞感のあるダンスの場への問題意識の交換は、有意義な時間となった。なお、ここでの議論を発展させ、本研究センター発行の機関誌『舞台芸術』に後日掲載する予定である。

撮影：松見拓也

研究会 2（公開）

テーマ：「ダンス作品創作における対話型鑑賞の試行」
日　時：平成 27 年 5 月 17 日（日）14:00-17:00
会　場：京都造形芸術大学 悠々館 Y31 教室
参加者：森山直人、きたまり、和田ながら、御厨亮、川那辺香乃、塚原悠也、今村達紀、岡崎大輔

主として美術鑑賞の場で普及している「対話型鑑賞」という方法を、ダンスの受容に応用することで、「鑑賞者による言語的な記述」という観点から、ダンスの振付の検証の可能性を探った。振付家とダンサーによるショートピースを題材とし、岡崎大輔氏と一般参加者を加えたワークショップの形式で実践した。

研究組織

主任研究者：
山田せつ子（ダンサー、コレオグラファー／京都造形芸術大学　舞台芸術研究センター主任研究員）

共同研究者：
森山直人（京都造形芸術大学舞台芸術学科教授）
國吉和子（ダンス批評／多摩美術大学造形表現学部客員教授）
溝端俊夫（大野一雄舞踏研究所）
溝端美奈（大野一雄舞踏研究所）
星野太（哲学／東京大学大学院（IHS）特任助教）

研究協力者：
髙樹光一郎（一般社団法人ハイウッド）
川口隆夫（ダンサー／コレオグラファー）
飯名尚人（映像作家）
きたまり（ダンサー／コレオグラファー）
平原慎太郎（ダンサー／コレオグラファー）
相模友士郎（演出家）
和田ながら（演出家／舞台制作）
御厨亮（ダンサー／舞台制作）
川那辺香乃（舞台制作）
岡崎大輔（京都造形芸術大学アート・コミュニケーション研究センター専任講師）
塚原悠也（ダンサー／コレオグラファー）
今村達紀（ダンサー／コレオグラファー）

テーマ研究 Ⅲ

セノグラフィの歴史アーカイブ構想

京都造形芸術大学舞台芸術学科教授／舞台照明 岩村 原太

概　要

当構想は、20 世紀において舞台芸術を方向付けてきた舞台照明の技術と美学（2013 年度テーマ研究 B-4）、その照明に関わる視覚的問題について考察を展開した舞台衣裳の現在（2014 年度テーマ研究 B-4）に引き続き、舞台美術（セノグラフィ）の根本をグラフィック／ビジュアル面から再検討しようとした研究である。

舞台美術の成り立ちにさかのぼって我々の舞台芸術全般を理解しなおす試みを劇場実験とし、セノグラフィの歴史・概念・発想等を整理するいくつかの観点から基礎資料をサーベイ、さらにこれらの成果をアーカイブする方法について議論の場を設けた。

セノグラフィの語は、「見たい」想い・「楽しみたい」気持ちに応える術、と広く定義することができる。その際には視覚的な出来事ばかりでなく気分や物語、照明や音響などにもセノグラフィの概念をかぶせて理解することが可能となるだろう。かつての劇場風景や舞台情景に心躍り、深く感心させられることが往々にしてあるというのも、その当時の見物人たちの「見たい」想い・「楽しみたい」気持ちを共有できるからであり、アーカイブの対象はそうした彼らの吃驚や感嘆の源泉を探る試みへと繋がっていく。

当アーカイブ研究は舞台芸術学科デザインコースの授業カリキュラムにこの発想を反映しつつ、改めて調査・研究領域を整理していくこととなった。

第 1 回研究会（非公開）

テーマ：セノグラフィーの歴史について、ビジュアルソース・アーカイブの意義確認
日　時：平成 27 年 5 月 9 日（土）14:00-17:00
会　場：京都造形芸術大学内 NA406 教室
講　師：杉山至
出席者：堀田充規　八角聡仁　鈴木健介　あごうさとし　岩村原太　塚本玲奈

杉山至レクチャー「Making the Scene」の紹介（劇場史でなく演劇史でなく、舞台美術の仕掛けと理論、実際の図像を集積した資料集であることの意義について）。

この研究会では、何をアーカイブするか、が当面の課題となることを確認。切り口はさまざまにあり、資料の検索も現在では比較的容易であるがゆえに、私たちがアーカイブすべき「舞台美術」の「歴史」とは何なのか、が問われるという結論に至る。それは例えば技法史（例えば遠近法的な）をたどるものでもなく、「セノグラフィ」の概念の進化または変遷を跡付ける「図像」が語るものであるかもしれない。この疑問について、実験を準備していく。

第 2 回研究会（非公開）

テーマ①：日本のセノグラフィーについて
テーマ②：アーカイブ手法の検討と課題の共有
日　時：平成 27 年 5 月 30 日（土）14:00-17:00
会　場：にしすがも創造舎 2 階 1 教室
出席者：池田ともゆき　佐藤慎也　鈴木健介　岩村原太　塚本玲奈

欧米のセノグラフィ資料収集とは別に、視野をアジア、現段階では日本の舞台美術をセノグラフィックに捉えなおし、アーカイブ出来る視座の構築を検討するべき、との討議。

調 査

テーマ①：プラハ・カドリエンナーレ現地調査
テーマ②：舞台美術教育の現在、舞台美術のアーカイブについて
日　時：平成 27 年 6 月 16 日（火）- 21 日（日）
調査員：堀田充規　岩村原太　塚本玲奈

アーカイブの様々として空間の説得力をもっとも感じさせたのは、やはり模型である。写真は映像と異なり撮影時の視点が明確に定まるため、模型に次いでその空間の表現を体感出来る。

エスキースやデッサン、CG は作家性が際立ち魅力的だが、客観的なアーカイブとしてはあまり信用できない。

映像記録については未解決の課題が多く残る。時間軸を伴うため撮影者の主観が強く反映される上に、編集によって情報の選択と伝達の強弱が操作されているケースが多いように思われた。

舞台美術家の仕事、セノグラファの存在証明はこのように展示できる制作物には託されず、彼らの「行為」や「姿勢」に宿るものであろう、と総括する。

第 3 回研究会（非公開）

テーマ①：日本舞踊の大道具
テーマ②：「定式」の問題
日　時：平成 27 年 7 月 14 日（土）16:30-17:30
会　場：京都造形芸術大学内 NA406 教室
講　師：中田節
出席者：杉山至　堀田充規　鈴木健介　あごうさとし　岩村原太　塚本玲奈

創作の習慣について、模倣や発展や続編や翻案や、幾度もの再演機会に上演を続けてきたと考えられる舞台芸術の、オリジナリティ（独創性・独自性）、クリエイティビティ（創造性）とは、果たしてどのような質のものか。新技術（照明や音響、機構、映像など）の導入にともなって「表現が発見」されてきた歴史が、定式の分析から読み取れる、との期待を共有する討議となった。

例えば歌舞伎など、江戸時代初演時の劇場風景、現代劇場の設備備品、この両者に意識をまたがせ、今の観客に何を聞かせ、

いかに見せるか。この過去と現在に背中と胸元を引き合わす仕事（定式）を見届けるべく、劇場実験の一として研究対象を「日本舞踊の照明」に拡げることとなった。

実 験（公開）

テーマ①：日本舞踊「鷺娘」の照明
テーマ②：定式道具とその照明デザイン
日　時：平成 27 年 8 月 22 日（土）13:00-16:00
会　場：京都芸術劇場　春秋座
講　師：北寄崎嵩
出席者：岩村原太　塚本玲奈

前回「日本舞踊の大道具」での課題（期待）を引き継ぎ、日本舞踊上演の実際を記録することを目的として実験を行った。ポイントは、狂言方と照明担当者の共同作業の進め方、立方他との情報共有の具体的方法、である。

照明あわせ（前明かりのフォーカス）

講師（北寄崎嵩先生）講義

第 4 回研究会（公開）

テーマ①：ギリシア演劇の舞台仕掛け
～『Making the Scene』を読む
テーマ②：メカネ、およびペリアクトイの再現
日　時：平成 27 年 8 月 28 日（土）9:00-18:00
会　場：京都芸術劇場　春秋座
出席者：杉山至　鈴木健介　岩村原太　塚本玲奈

『Making the Scene』所収の図版をもとに、ギリシア時代演劇の舞台装置家たちの行為を追体験する実践型の研究会（ワークショップ）。メカネとは現代で言うクレーン（懸垂）装置であり、出演者の上空からの登場を可能とする。ペリアクトイは舞台背景装置の一種であり、回転する三角柱の各面に描かれた景色を、タイミングを合わせるなどして効果的に転換できるようにした仕掛けである。

古代の技術に秘められている「本当はこんな風に見せたい」という意思、「本来はこんな感じに作りたい」といういま現在の私たちの発想がリンクする経験となった。

メカネ（クレーン）とペリアクトイ

第 5 回研究会（公開）

テーマ①：舞台美術の歴史アーカイブ構想をめぐって
テーマ②：具体的アーカイブに向けての作業整理、サーベイの計画
日　時：平成 27 年 8 月 29 日（土）19:30-20:00
平成 27 年 8 月 30 日（日）10:00-18:00
会　場：京都芸術劇場　春秋座
講　師：八角聡仁
出席者：杉山至　鈴木健介　岩村原太

8 月 29 日

6 つの分科会として、28 日 WS の報告、6 月に調査出張したプラハ・カドリエンナーレのレポート、当セノグラフィ・アーカイブ研究会の経過報告、「景について」レクチャー、を開催。

8 月 30 日

フィールドワーク「セノグラフィの視点で庭園や建物、街並を眺め、スケッチし、分析する」。大徳寺高桐院 1 時間半、休憩を兼ねて共有、今宮神社より船岡山、引接寺、大報恩寺、休憩、とりまとめ。

研究組織

研究代表者：
岩村原太（京都造形芸術大学舞台芸術学科准教授 / 舞台照明家）
共同研究者：
杉山至（舞台美術家／ NPO 法人 SAI 主宰）
堀田充規（大阪芸術大学舞台芸術学科准教授）
池田ともゆき（舞台美術家）
研究協力者：
浅沼秀治（NPO 法人有形デザイン機構）理事
佐藤慎也（日本大学理工学部建築学科准教授）
八角聡仁（近畿大学文芸学部教授）
鈴木健介（NPO 法人 SAI メンバー）
あごうさとし（NPO 法人 アトリエ劇研 ディレクター）
石田昌也（舞台美術家）
青木勉（舞台美術家、大原野アトリエ）
リサーチアシスタント：
塚本玲奈（舞台制作者）

テーマ研究 Ⅳ

アジアの大学における演劇教育
―劇場を活用した舞台教育の方法論的探究

京都造形芸術大学舞台芸術学科教授　平井 愛子

概要

日本では、大学が演劇人（特に俳優）の養成を担ってきた歴史はまだ浅いが、以前から大学等高等教育機関での演劇教育が積極的に行われきた日本を除くアジア各国では、欧米の先進的なメソッドやシステムを進んで採用し、自国の伝統と融合させた実践的カリキュラムを有する大学が数多く存在する。5カ年の継続的なプロジェクトとして立ち上げた本研究は、各年度にアジア芸術教育協議体（ALIA）に加盟している大学より研究協力者を招聘してワークショップと研究会を実施することを通して、日本の高等教育機関に相応しい俳優養成のあり方を研究する。

第2回となる平成27年度は、韓国総合芸術学校より演技指導者2名を招聘し、本学舞台芸術学科在籍者と一般を対象とした2日間のワークショップと共同研究者を交えた研究会を実施した。

また、平成27年11月に「俳優養成」をテーマに韓国総合芸術学校で開催されたシンポジウムとワークショップを本研究の一環とした（研究代表者がプレゼンター／ワークショップ講師として参加）。

韓国と日本で開催されるシンポジウムとワークショップを包括的にとらえることで、より発展的な研究と検証を目指した。

第1回研究会①（公開シンポジウム）

テーマ：「現代演劇の俳優養成カリキュラムにおける伝統芸能の必要性」
日　時：平成27年11月16日（月）15:00-19:00
会　場：韓国芸術総合学校
講　師：キム・ソネ、キム・スギ、パク・サンハ、ソ・チャンシク、平井愛子
聴講者：韓国芸術総合学校演劇学科大学院生（約20名）
内　容：韓国芸術総合学校演劇学科および京都造形芸術大学舞台芸術学科のカリキュラム全体像とカリキュラムに採用している古典芸能について紹介の後、キム・スギ氏が「韓国で初めて体系的な俳優養成プログラムをカリキュラム化した韓国芸術総合学校演劇科の理念と目的、古典芸能の位置づけとその意味」を発表。続いて各々の講師が現代演劇の俳優養成カリキュラムにおける伝統芸能の必要性（または不必要性）、有効性、問題点など、独自の意見を発表した。その後、聴講者との意見交換や質疑応答が行われた。

第1回研究会②（公開ワークショップ）

テーマ：「シェイクスピア劇のための身体と感覚訓練」
日　時：平成27年11月17日（火）17:00-19:00
会　場：韓国芸術総合学校演劇学科
講　師：平井愛子
ワークショップ参加者：韓国芸術総合学校演劇学科大学院生（約20名）
内容：「ハムレット」より抜粋した一場面をテキストとして使用。講師の発する様々な「言葉」から直感的に発想したことを身体的ジェスチャーや動きに転換するエクササイズを実施。その後、エクササイズから抽出した動きを台詞と重ね、さらには「感情の記憶」を加えていくことで一場面を演じる際の多様な可能性を模索した。

第2回研究会①（公開ワークショップ）

テーマ：「俳優の身体と発声」
日　時：平成28年2月10日（水）10:00-15:00
会　場：京都芸術劇場　studio21
講　師：キム・スギ、キム・ソネ
ワークショップ参加人数：26名
ワークショップ見学者数：5名
内容：午前中は、キム・スギ氏が身体訓練を実施。アジアの身体訓練（ヨガ、太極拳、インド武術カラリパヤットなど）を採用した独自の俳優養成法を持つウィスコンシン大学大学院で演技を学んだ同氏が「自然な演技とは何か」をテーマにヨガや太極拳の基本的な型を取り入れたエクササイズを紹介。その後、具体的イメージや台詞を同じ動きの中に加えていくことで「自然な演技」に通じる「身体と思考（心身）の一体性」を獲得していくプロセスを体験した。午後からは、キム・ソネ氏が発声訓練を実施。生態学に基づいた正しい声の出し方を習得するた

めの基礎エクササイズの数々を行った。

第２回研究会②（公開シンポジウム）

テーマ：「韓国芸術総合学校演劇学科の教育内容」
日　時：平成 28 年 2 月 10 日（水）15:30-18:00
会　場：京都芸術劇場　studio21
講　師：キム・ソネ、キム・スギ
モデレーター：平井愛子
聴講者数：31 名
内容：キム・ソネ氏が、韓国芸術総合学校創立（1994 年）当初より体系的な訓練によって専門的な俳優を育成する韓国初の高等教育機関として設立された同学演劇学科の理念とカリキュラムを紹介。続いて、「演技」「身体訓練」「発声と発話」を大きな核としたカリキュラムの中で主に「発声とスピーチ」を指導しているキム･ソネ氏が、同氏が採用している「発声法」や「スピーチ」の方法論詳細を発表した。その後、「演技」「身体訓練」を指導しているキム・スギ氏が、同氏が学んだウィスコンシン大学アジア演劇実験プログラムの内容や俳優養成の中での「身体訓練」の目的、必要性に関して発表した。その後の質疑応答の中で、同校卒業生の活動状況などを例に挙げ、体系的訓練の有用性が話し合われた。

第２回研究会③（公開ワークショップ）

テーマ：「俳優の身体と発声」
日　時：平成 28 年 2 月 11 日（木）10:00-15:00
会　場：京都芸術劇場　studio21、京都芸術劇場　春秋座
講　師：キム・スギ、キム・ソネ
ワークショップ参加人数：26 名
ワークショップ見学者数：7 名
内容：第１日目に引き続き午前中は、キム・スギ氏が身体訓練を実施。あえて１日目に行ったエクササイズを繰り返すことがされた。その中で、反復的に同じエクササイズを行うことで、自身の身体が一定の動きを「第二の天性」として獲得していくことの有効性が強調された。午後からは場所を春秋座へ移しキム・ソネ氏が発声とスピーチを実施。第１日目に実施した発声法を復習しながら「ハムレット」のモノローグをテキストとしてスピーチへと発展させた。後半は、春秋座舞台上で空間把握のエクササイズを加え、劇場での実際的なスピーチ（発話）の方法論が試された。

第２回研究会④（公開シンポジウム）

テーマ：「欧米演技メソッドの韓国での適応」
日　時：平成 28 年 2 月 11 日（木）15:30-18:00
会　場：京都芸術劇場　studio21
講　師：キム・ソネ、キム・スギ、内野儀
モデレーター：平井愛子
聴講者数：32 名
内容：韓国芸術総合学校演劇学科教授陣は全員が欧米で専門的な俳優訓練を受けた経歴を持っている。

キム・スギ氏が、同学科が欧米留学経験者を教授として迎え入れている主たる理由、また同学科が 1994 年より辿ってきた欧米の演技法の韓国での適応化の歴史と現在のあり方を発表した。続いて、イギリスで発声法とスピーチを学んだキム・ソネ氏が、欧米メソッドのセオリーを採用しながら韓国語対応を目指して変換、転用してきた独自の研究内容を発表した。その後、共同研究者の内野儀氏も加わり「韓国の演劇事情」や「俳優を取り巻く環境」と「俳優養成」の相関関係や日韓コラボレーションによる演劇の実績と今後などについて話し合われた。

研究組織

研究代表者：
平井愛子（京都造形芸術大学舞台芸術学科教授）
共同研究者：
内野儀（東京大学大学院総合文化研究科教授）
研究協力者：
キム・ソネ（韓国芸術総合学校演劇学科教授）
キム・スギ（韓国芸術総合学校演劇学科教授）
金世一（俳優／演技講師）
清水幸代（舞台制作者）

公募研究 I

「ダンス 2.0」の環境構築を通して今日的課題へとダンスをつなぐ試み

日本女子大学准教授　木村 覚

1. 研究方法と目的

本研究は、〈「ダンス 2.0」の環境構築を通して今日的課題へとダンスをつなぐ試み〉という表題の下、ダンス・クリエイションに必要なコミュニケーションが活発に展開するための研究活動である。「ダンス 2.0」とは、旧来型のダンス・クリエイションを更新した状態をイメージしている。それは、インターネットサイト上でその「環境構築」を行うことで、ダンス創作が「今日的課題」へと接続する状況が生まれることを指し、本研究はそうした状況の確立を目指している。

より具体的に言えば、本研究は BONUS の第三回連結クリエイション並びにその最終的な成果発表会（イベント名「超連結クリエイション」）を兼ねている。BONUS は筆者がディレクターを務め、インターネットのサイトを主たる交流の場として展開する「ダンスを作るためのプラットフォーム」である。「連結クリエイション」とは BONUS の主要なプロジェクトであり、作家たちにテーマを委ね（作家たちをテーマと「連結」させ）、テーマに応える形で作家たちが創作を行うといった体裁をとっている。BONUS はその創作に際して、作家たちが求める人材をコーディネートしたり（作家たちを多様な人物・機会と「連結」させ）、自ら対話者となって創作のサポートをしたりといった支援を行う。こうしたプロセスのみならず最終的な成果発表もまたサイト上にそのほとんどのコンテンツがアーカイヴされ、それによってこの活動に直接関わらなかった現在のまた未来の作家たちのクリエイションを刺激できたらと考えている。

今回は、こうした狙いを背景に、BONUS が「障害者との共生」というテーマを掲げ、砂連尾理氏、野上絹代氏、塚原悠也氏の三人にこのテーマを委ねた。このテーマを挙げた理由は、パラリンピックの 2020 年東京開催にも関連して、障害者をダンサーとして招聘するダンス公演があちこちで行われる一方で、そうした公演の多くが「障害者も（既存のダンスが）踊れる」といったコンセプトにやや偏る傾向があり、そうした傾向に対して意識の変更が求められていると考えるからである。またむしろ「障害者」という課題は既存のダンスに疑いを挟む可能性ばかりでなく、ダンスの概念を更新する可能性さえ宿しているのではないかとも考えている。「病」や「老い」の身体性に注目した土方巽は、この点の先駆者だったといえよう。しかし、現在では不具の身体は土方がそう捉えたように単なる（過去の、また幻想的な）イメージではなく、現実の隣人の持ち物である。ある課題を論じる際にその当事者が議論の輪に加わっていることは、今日では非常に重要なポイントであると本研究は考える。その点で、今回の活動に関わってくださった障害者の方、とくにイベントに出演してくださった熊谷晋一郎氏には感謝している。

2. 研究会について

まず、2015 年 8 月 15 日に研究会を行った。「障害者とダンス」というテーマを掘り下げ、三人の作家たちのクリエイションを刺激することが目的であった。

前半は、研究者として伊藤亜紗（東京工業大学）氏、コーディネーターとして田中真実（ST スポット横浜）氏、実演者としてテーマを委ねた作家でもある砂連尾氏に、各専門家の立場から研究発表を行ってもらった。伊藤氏からは美学や身体論の立場から障害者の身体性を論じてもらった。田中氏からは横浜市でアーティストを特別支援学校（学級）へ派遣してきた経験に基づき、地域（とくに学校）とアーティストが出会う場で起きている出来事や課題について、砂連尾氏からは本テーマを扱う先駆的作家の立場から、特別養護老人ホームなどでの活動を映像とともに紹介してもらった。

後半は、野上氏、塚原氏にも加わってもらい前半の研究発表をベースに「障害者との共生」というテーマに関して、前半の発表者たちとディスカッションを行った。そこでは、今後クリエイションを進める際に「障害者だから誰々と交流する」という発想に疑問が呈されるなど、本テーマの本質を抉るような問題が提起されるなど、活発な議論が交わされた。

3. イベントについて

2016 年 1 月 24 日に超連結クリエイションというタイトルでイベントを行った。テーマに基づき三人の作家が考えたアイディアを舞台上でプレゼンテーションしてもらった。

一組目として、砂連尾氏が熊谷氏とともに登場し、YCAM（山口情報芸術センター）が製作した RAM（Reactor for Awareness in Motion）を媒介にして、互いの身体性を比較するプレゼンテーションを行った。熊谷氏は大学教員であり、小児科医であり、脳性麻痺の身体を持ち電動車椅子で生活している。RAM（エンジニアに大脇理智氏）はスクリーン上の棒人形がセンサーに身を包まれたダンサーの身体を反映し、鏡のような機能を果たすシステムである。それぞれの身体を反映した二体の棒人形の並ぶ真ん中にもう一体、それぞれを 50% ずつ反映した棒人形が登場し、熊谷氏の 50% 分で曲がった棒人形を砂連尾氏の動作によって直立にするといった試みが行われた。後に砂連尾氏はその瞬間を熊谷氏に振り付けられた時間であると

振り返った。このプレゼンテーションで印象深かったのは、二人が喋りながら被検体となったことであり、とくに著書『リハビリの夜』でも知られる熊谷氏は、身体へのデリケートな言葉遣いでこの場を圧倒した。

二組目として、脳性麻痺で普段は車椅子で生活をしている方とツイスターゲームを行う装置を開発した野上氏が、その動機や経緯や成果を紹介した。装置は小さな宇宙船を模したもので、カーテンや蛇口やドライヤーなど日常生活のアイテムが内壁に貼り付けられ、二人は共同して外からの指令に応じてそれらのアイテムに触れるゲームに興じた。その模様はミュージックビデオ風の映像に収められた。夢中にゲームに集中することで、踊る恥ずかしさや身体性の違いに関するこだわりを解消することが目指された。

三組目として、塚原氏のアイディアが上演された。近隣の奇妙な動作を行う路上生活者に注目し、彼の動作を模倣することでそれがサッカーのフェイントにならないか、という思いつきが実演された。舞台にはゴールが設置され、変則的なサッカーの試合が行われた。ここには、サッカー（スポーツ）＝ルール＝社会的規範に、それを掻い潜る路上生活者の動作（フェイント）＝ルールの逸脱が対峙するという構図が含意されていた。また動作を借りた路上生活者には、塚原氏が会場でポストカードを販売し、その収益を彼に渡すことで借りを返す予定であることが説明された。

最後に、伊藤亜紗氏、舞踊研究者の古後奈緒子氏、芸術学の石谷広寛氏に加わってもらい、作家や出演者とともに一時間弱のディスカッションを行った。

4. 振り返って

以上が研究会とイベントの成果である。作家にテーマを委ねることでこれまでにはない多様で創造的なアイディアが生まれたと自負している。実際に課題に向き合い、その当事者に出会うことで、ダンスのクリエイションが今日的な意義を帯びるようになった。さらに、そのことで「障害者」と出会うことのデリカシーが自ずと問われた。熊谷氏が、キャスティングボードを奪われることなく、むしろ奪うためにイベントへの出演を希望したと話してくれたことは､印象的だった。活動の中で｢共生｣という言葉を用いたが、違いを無視するのでも、違いを無批判に前提するのでもなく、スリリングな対話を真摯に誠実に行うことの重要性を確認する機会となった。また、現在準備しているBONUSサイトでのアーカイヴ公開によって、この成果が今後の（今回参加の三人のみならず、多くの）作家たちのクリエイションに、有効な刺激剤となることを期待している。

研究組織

研究代表者：
木村覚（日本女子大学准教授）
共同研究者：
伊藤亜紗（東京工業大学准教授）
砂連尾理（振付家、神戸女学院大学非常勤講師）
研究協力者：
熊谷晋一郎（東京大学大学院准教授）
塚原悠也（contact Gonzo）
野上絹代（FAIFAI）
加藤和也（FAIFAI）
小沢康夫（日本パフォーマンス／アート研究所）
石谷治寛（甲南大学人間科学研究所博士研究員／芸術学）
古後奈緒子（大阪大学文学研究科文化動態論専攻助教／舞踊研究・批評）
田中真実（NPO 法人 ST スポット横浜 事務局長）

第 1 回研究会（公開）

テーマ：第 3 回　連結クリエイション「障害者との共生」
日　時：平成 27 年 8 月 15 日（土）、14:00 ー 18:00
会　場：京都造形芸術大学　至誠館 1 階　S11 教室
一般参加者：26 名
【第一部】3 グループによる研究発表　14:00-16:00
- **グループ A　身体の障害とともに**
  発表者　伊藤亜紗
- **グループ B　老いた身体とともに**
  発表者　砂連尾理
- **グループ C　障害・病を抱えた子供の身体とともに**
  発表者　田中真実

【第二部】総合ディスカッション　16:15-18:00
- **パネリスト：**伊藤亜紗／砂連尾理／田中真実
  塚原悠也　野上絹代　木村覚

第 2 回研究会（公開）

テーマ：第 3 回超連結クリエイション
日　時：平成 28 年 1 月 24 日（日）17:00-20:00
会　場：京都造形芸術大学　京都芸術劇場 studio21
発表者：砂連尾理、塚原悠也、野上絹代、熊谷晋一郎
コメンテイター：石谷治寛、古後奈緒子、木村覚、伊藤亜紗
一般参加者：67 名

公募研究 II

マヤコフスキー研究
――詩人の仕事の解明と新しい演劇言語の開発

演出家／京都造形芸術大学舞台芸術学科・映画学科客員教授　三浦 基

研究会概要を含めた報告

ヴラジーミル・マヤコフスキー（1893-1930）はロシア・アヴァンギャルドを代表するソ連の詩人。詩のほかに戯曲も書いており、演出家・メイエルホリドが『ミステリヤ・ブッフ』『南京虫』などの初演を手がけた。マヤコフスキー作品は「何もかもちりぢりばらばらで読みにくい」（レーニン）と評されるが、「社会主義の芸術をつくりたい」と言い、「広汎な民主主義によってのみ達成される芸術」を目指したマヤコフスキーが自身の作品の中でどのようにその体現を試みていたかははかり知れない。

地点はこれまでも、未完の断章を用いたブレヒト作品の上演や、コラージュの手法を用いた作品を多数制作してきた。「ちりぢりばらばら」なテキストを、継続的に活動を共にしている劇団だからこそなし得るアンサンブルの力と、これまで培った独自のドラマツルギーを用いて読み解く作業を行い、マヤコフスキーが目指した舞台芸術のあり方に触れ、新たな演劇表現の可能性を探った。

研究会を通じ、初演当時の演劇とサーカスの関係性を知り、初の試みとなる円形舞台での劇場実験を行なった。その成果を踏まえて東京で発表された公演では、空間現代の音楽とフライングの手法を用い、言葉を異化しつつも空間全体が渦巻くような作品が完成した。

第１回研究会（非公開）

エクスポサーカス調査

日　時：2015 年 5 月 11 日（月）10：00 ― 14：00
会　場：リトルワールド（愛知県犬山市）
モデレーター：楯岡求美
活動内容：

6 月 11 日の研究会にゲストとしてお迎えする大島幹雄氏がプロデュースをつとめる「エキスポサーカス」の調査。ベトナム、チェコ、カザフスタン、イタリアから招聘された多国籍のアーティストによる出し物が上演される。具体的には、ヘアースイング、ハンドバランス、パーチアクト、エアリアル・バンブーなど。1910 ～ 20 年代、サーカスは単なる見せ物としてではなく、ソビエトの民衆が享受すべき批評精神に満ちた芸術として注目され、人気を博した。『ミステリヤ・ブッフ』の再演（1921 年）には、道化師ラザレンコが参加し、マヤコフスキーやメイエルホリドがそのパフォーマンスを絶賛したと伝えられている。マヤコフスキーの作品を、サーカスから読み解く試みとしての 6 月 11 日の研究会を前にして、予習とも言うべきサーカス体験となった。

第２回 研究会（非公開）

マヤコフスキー入門
～未来派とロシア・アヴァンギャルド

日　時：2015 年 5 月 26 日（火）17:30-20:00
会　場：アンダースロー（京都市左京区）

講師：楯岡求美
モデレーター：三浦基
活動内容：

マヤコフスキーが生きた時代とロシアの未来派についての概論。マリネッティ率いるイタリアの未来派との相違点や、代表的作家ブルリューク（詩人）、マレーヴィチ（画家）などの作品、『ミステリヤ・ブッフ』に見られる未来派の特徴などについて楯岡氏より講義を受ける。マヤコフスキーが出演して全篇が残っている無声映画『淑女とフーリガン』（1918 年）を鑑賞。

また、『ミステリヤ・ブッフ』のテキストと空間現代の音楽を用いた即興稽古を合せて行う。

第３回研究会（非公開）

サーカス学～道化師ラザレンコと『ミステリヤ・ブッフ』

日　時：2015 年 6 月 11 日（木）19：30 ― 22：00
会　場：アンダースロー
講　師：大島幹雄
モデレーター：三浦基、楯岡求美
活動内容：

『ミステリヤ・ブッフ』の再演にマヤコフスキーたっての希望で出演した道化師・ラザレンコ。〈赤い道化師〉と異名をとったラザレンコの生涯と『ミステリヤ・ブッフ』について、講師の大島幹雄氏から解説をいただきながら、革命前後のソ連で試みられたサーカスと演劇の融合について具体的な作品にあたりながら考察した。大島氏の講義に続き質疑応答を行い、サーカスの魅力、また、サーカスとノスタルジーについて分析した。

第４回研究会（非公開）

聖史劇からアヴァンギャルド演劇まで
～マヤコフスキーの視界を覗く

日　時：2015 年 7 月 25 日（土）18：00 － 21：00
会　場：アンダースロー
講　師：杉山博昭、鴻英良
活動内容：
イタリア聖史劇研究を専門にされている杉山博昭氏をお迎えし、15 世紀のフィレンツェで盛んに上演された聖史劇の形式や当時の上演の様子についてお聞きした。そのお話を受けて、19 世紀末から 20 世紀初頭のロシア・アヴァンギャルドを専門に広く現代演劇を研究していらっしゃる鴻英良氏に、聖史劇とロシア・アヴァンギャルドの関連（ありやなしやを含めて）について展開していただいた。古代ギリシア・ローマを礼讃するルネサンスの考え方と、それ以前の王の入城行進・パレードに演劇の起源があるとする考え方、それらをロシア・アヴァンギャルドがどのように受け止め、自らの表現と結びつけたかについて考察した。

第５回劇場実験　（公開）

一般参加者数：154 名

「マヤコフスキー研究」／劇場実験

日　時：2015 年 9 月 7 日（月）19：30 － 21：00
会　場：京都芸術劇場 春秋座
モデレーター：三浦基
活動内容：ゲスト講師によるレクチャーや、地点の俳優がバンド「空間現代」のメンバーと共に行う実践を通して、5 月から進められて来た当研究の集大成として劇場実験を行った。研究会でそれぞれが得たインスピレーションを個別発表を通して共有し、最終的には『ミステリヤ･ブッフ』のワンシーンを舞台化。大島氏のレクチャーで『ミステリヤ・ブッフ』の再演では道化師ラザレンコが出演するなど、マヤコフスキーや演出を担当したメイエルホリドにとって、サーカスが一つのモチーフであったことを受け、円形舞台での発表を試みた。
劇場実験の流れ
個別発表その 1：楯岡求美による発表
個別発表その 2：地点による発表　マヤコフスキー『ミステリヤ･ブッフ』第 1 幕 第 4 場、第 2 幕 第 16 場より
個別発表その 3：空間現代による発表
＝休憩＝
デモンストレーション　マヤコフスキー『ミステリヤ・ブッフ』より

第６回研究会（非公開）

地点『ミステリヤ・ブッフ』再考
～マヤコフスキーとユートピア

日　時：2016 年 1 月 16 日（土）14：00 － 18：00
会　場：アンダースロー
講　師：コルネリヤ・イチン
モデレーター：三浦基、楯岡求美
活動内容：ベオグラード大学人文学部教授で、ロシア・アヴァンギャルド期を中心とした 20 世紀のロシア・ソ連文化を専門に研究されているコルネリヤ・イチン氏をお迎えし、劇場実験を経て昨年 11 月に最終的な作品として仕上がった『ミステリヤ･ブッフ』の記録映像を題材に、改めてマヤコフスキーが作品によって何を体現しようとしていたか、批評的に解析した。特に、『ミステリヤ･ブッフ』で戯画的に表現されている「清潔な人々」と「不潔な人々」の対立構造など､地点の『ミステリヤ･ブッフ』で表現し切れなかった部分について分析した。

研究組織

研究代表者：
三浦基（演出家／京都造形芸術大学舞台芸術学科・映画学科客員教授）
共同研究者：
楯岡求美（演劇学／文学（博士）、神戸大学国際文化研究科准教授）
田嶋結菜（舞台制作）
研究協力者：
安部聡子（俳優）
石田大（俳優）
小河原康二（俳優）
窪田史恵（俳優）
河野早紀（俳優）
小林洋平（俳優）
小森あや（舞台制作）
野口順哉（ミュージシャン／空間現代）
古谷野慶輔（ミュージシャン／空間現代）
山田英晶（ミュージシャン／空間現代）
鴻英良（演劇批評家）
杉山博昭（早稲田大学高等研究所助教）
大島幹雄（作家・サーカスプロモーター）

※写真はすべて松見拓也による撮影
※非公開の研究会の様子は採録を WEB 上に公開しています。
URL：http://www.chiten.org/mayakovsky

公募研究 III

想起の空間としての劇場

東京藝術大学大学院音楽研究科 専門研究員／ドラマトゥルク 横堀 応彦

1. 研究目的

本研究プロジェクトの目的は劇場が持つ「想起の空間」としての機能およびその可能性について、劇場実験を行いながら考察することにある。平成26年度から継続して実施しており、本年度が2年目の実施となった。

舞台芸術のアーカイヴ研究は現在国際的に最も盛んに行われている研究テーマの1つであり、近年日本国内でも多くの研究が行われている。平成25年に行われた日本演劇学会研究集会のテーマが「演劇とアーカイブ―集積から構築へ―」であったことも1つの証左だが、それらの研究内容は既に完成されたものをいかに貯蔵するかという問いに関するものが多くを占めており、記憶を取り出す想起の機能そのものを問う研究はそれほど進んでいるとは言えない状況にある。舞台芸術の上演はそれ自体が埋もれた出来事や思索の想起とみなすことが可能であり、研究者等はそこで生じた作品をさらに想起して自身の研究活動へ繋げていく。昨年度から開催している《Showing》シリーズではこの重層的な構造に着目し、アーティストと研究者双方が舞台芸術の上演に関わりながら、記憶の蓄積と想起のプロセスを問うことを試みてきた。平成26年度は音響作家・荒木優光による音響上演『パブリックアドレス - 音場2』を通して「音響」の物質性について考察し、写真メディアを扱う美術家・加納俊輔による上演作品『山びこのシーン』を通して「写真」を受容する際のパフォーマンス性に着目した。それぞれの上演には複数の研究協力者に立ち会ってもらい、参加アーティストを交えたアフタートーク・レクチャーを実施したほか、事後に批評文を執筆してもらいウェブサイト上で公開した。平成27年度は《Showing》シリーズを1回、「記録映像の活用法」と題した新シリーズを1回実施した。

2. 《Showing》03 映像 伊藤高志 マルチプロジェクション舞台作品『三人の女』

今年度実施した第3回目の《Showing》シリーズでは、日本の実験映画を代表する作家の1人である伊藤高志を招聘し「映像」に着目したマルチプロジェクション舞台作品『三人の女』を発表した。研究分担者の荒木優光が音響構成を担当し、平成27年11月～平成28年1月にかけてクリエーションが行われた。なお平成27年12月17日（木）には実際に京都芸術劇場春秋座の舞台上で実験を行った。

伊藤は、映像メディアの条件に対して自覚的に創作を行っており、フィルムという物質や、映画は静止画の連続であるという映像の構造、長時間露光といったカメラの機能、あるいはプロジェクションという上映方法を組み込んだ作品を発表している。平成27年10月29日（木）～11月1日（日）にはLumen gallery（京都・五条）にて伊藤高志映像個展が開催され、A・B両プログラムを通して全23作品が上映された。

今回の劇場実験『三人の女』は伊藤氏が撮りおろした同名の新作映画が4つのスクリーンから上映され、劇場空間ならではの演出を織り込んだマルチプロジェクション舞台作品として平成28年1月23日（土）と1月24日（日）に計6回上演された。1月23日（土）16:00の回終了後は、春秋座ホワイエにて伊藤高志、荒木優光、阪本裕文によるトークを行った（モデレーター：横堀応彦）。また阪本裕文、平倉圭には公演の批評文の執筆を依頼し、その内容はウェブサイト上で公開した。このほか福尾匠による論考「In（Search of）a Lost Image, Lost In a Stage：伊藤高志『三人の女』」（『hyphen（ハイフン）』創刊号（DG-Lab）掲載）、高嶋慈によるレビュー（artscape掲載）も発表されている。2日間という限られた日数の上演であったにも関わらず多くの観客が訪れた本公演は、劇場という想起の場の社会的・歴史的機能を問う上で大きな意義があったものと考えられる。再演を望む声も多く、平成28年8月30日（火）・31日（水）にはあいちトリエンナーレ2016映像プログラムとして愛知県芸術劇場小ホールで再演が行われた。

伊藤高志「三人の女」（2016） ©Shunsuke Kano

3. 上映会「記録映像の活用法」

平成27年6月13日（土）に実施した上映会「記録映像の活用法」は、用途があったりなかったりするまま撮影・編集された記録映像、またはまったく用途がわからなくなっている記録映像を、ただひたすら見てみようというアイディアから荒木優光と村川拓也が企画したものである。記録されたものを扱うことで得られる（得られない）ものは何か。ある期待値を持った活用法や参考映像の上映などを各回ごとに設定し検証していくことが本企画の目的である。特にこれといった目的も無く、または何らかの目的で撮影された舞台の記録映像に、別の目的を与えて上映してみてはどうだろうか。この問題意識を出発点とし、第1回は関西を拠点に活動している俳優の武田暁が出演し

伊藤高志「三人の女」（2016）　©Shunsuke Kano

た舞台作品の記録映像から俳優が出演しているシーンを抜粋してつなぎ合わせ、各作品の間にインタビュー映像を交えたものを上映した。なお荒木は記録にまつわる作業集団 archives pay を発足させ、本研究プロジェクトのほかにもアーカイヴに関する取り組みを行っていることを付記しておく。

研究組織

研究代表者：

横堀応彦（東京藝術大学大学院音楽研究科 専門研究員／ドラマトゥルク）

共同研究者：

荒木優光（音響作家）
針貝真理子（慶應義塾大学文学部 非常勤講師）
中山佐代（制作者、マレビトの会）

研究協力者：

伊藤高志（京都造形芸術大学映画学科教授）
八角聡仁（近畿大学文芸学部教授）
阪本裕文（稚内北星学園大学准教授）
平倉　圭（横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院・教育人間科学部 准教授）
村川拓也（演出家・映像作家）

伊藤高志「三人の女」（2016）　©Shunsuke Kano

研究会別の活動報告

第 1 回研究会（公開：観客数 15 名）

記録映像の活用法
第 1 回「俳優・武田暁　2002 年 -2013 年の出演記録」

日時：平成 27 年 6 月 13 日（土）15:30-19:00
会場：京都造形芸術大学 芸術文化情報センター 映像ホール

第 2 回研究会（非公開）

『三人の女』に向けたクリエーション

日時：平成 27 年 11 月～平成 28 年 1 月
会場：京都造形芸術大学ほか

第 3 回研究会（公開：観客数 326 人）

《Showing》03 映像　伊藤高志 マルチプロジェクション舞台作品『三人の女』

日時：平成 28 年 1 月 23 日（土）14:00、15:00-、16:00-、18:00-
平成 28 年 1 月 24 日（日）11:00-、12:00-
会場：京都芸術劇場　春秋座（京都造形芸術大学内）

2013 年度 ~2015 年度外部評価

「舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点」では、この 3 年間のスタートアップ支援事業として行った諸事業についての外部評価を 3 名の方に行っていただきました。以下、それを全文掲載します。

外部評価委員　大阪大学名誉教授　市川 明

1. 組織、運営体制

京都造形芸術大学が目指す本研究拠点事業は、舞台芸術研究と舞台芸術作品の創造との連携を、劇場というラボを通して実践するという意欲的な試みである。大学内には京都芸術劇場(春秋座と studio21）という本格的な劇場施設があり、事業を推進する格好の条件を提供している。

京都造形芸術大学舞台芸術研究センターの所長が本研究拠点のリーダーを務めると定められている。拠点リーダーには、おそらくこうした事業にもっとも適しているだろうと思われる渡邊守章が初年度（平成 25 年度）は当たった。平成 26 年、27 年度は渡邊に代わり、能の研究者として著名な天野文雄が拠点リーダーを務め、渡邊は顧問として天野をサポートしている。渡邊はテーマ研究の代表者でもあり、高齢であることを考えれば、この人事は妥当であり、体制の強化につながる積極的な意味を有していると思われる。事務局長は舞台芸術学科教授で、京都国際舞台芸術祭の実行委員長も務める森山直人で、さまざまな企画立案、会計などの業務をこなしている。この三人の体制は強固で、拠点事務局は専用の事務室を持ち、専任職員を 2 名（平成 26 年度は 3 名）おいている。ただ森山も本事業の中心をなすテーマ研究の代表者であり、業務が彼に集中し、十分に処理できない事態が生まれる可能性もある。こうした点を考えれば、専任職員以外に研究面で森山を支える、研究者の助教を事務局次長に置く必要があるだろう。

運営委員会は 19 名の運営委員（初年度は 15 名）で構成されており、研究プロジェクトの審査、採択をはじめ、本事業のすべての研究活動を統括する重要な組織である。年間 3、4 回の会議が開かれており、円滑に運営されている。だが参加状況は必ずしもよくない。各大学での専任教員の業務は年々増加しており、仕方がないことかもしれないが、委任状を提出せず欠席している委員も毎回数名いる。東京からの委員が多いのもその一つの原因かもしれない。学内の委員は平成 27 年度には 6 名（事務局の 3 名＋3 名）いるが、学内の運営委員の数をもう少し増やしてはどうだろうか。同時に関西で演劇や舞台芸術の専攻を持つ大学（近畿大学、大阪芸術大学、大阪大学など）から関係部局に所属する教員を委員に選び、連携を強めるなどの工夫も必要だろう。

2. 事業内容（年度別）

2013 年度

初年度であり、文部科学省の決定や予算の内示が遅かったこともあり、9 月に運営委員会の準備会を開き、採択された場合にすぐスタートできるような準備態勢をとっている。内部者だけの会議だが、早稲田大学文学芸術院の教授で、早稲田大学演劇博物館の館長も勤めた竹本幹夫を招いて、事業推進のための助言を受けたことは重要だと思われる。なお早稲田では委員会に四つの小委員会を設けているとのことだが、運営委員会の体制が整えばこうしたことも考慮の必要があるだろう。

初年度は京都造形芸術大学の研究者・芸術家が中心となる課題設定型の研究（テーマ研究）のみを募集し四つの課題が採択されている。うち二つのプロジェクトの研究代表者を拠点リーダーの渡邊が務め、一つを事務局長の森山が務めている。研究テーマの広がりという点では欠ける面があるが、初年度なので仕方がないであろう。四つのプロジェクトとも大きな成果をあげ、特に渡邊の第 1 プロジェクトでは、京都芸術劇場・春秋座を使い、7 回の研究会を公開で行い、本格的なマルチメディアシアター作品『葵上／二重の影』を成功させるなど、文字どおり本事業の牽引車の役割を果たしたと言える。次年度の学内外からの公募（11 月、締め切りは 1 月）と、採択（3 月）も並行して行なわれ、運営委員会も 3 月は 2 回開かれており、本格的な事業が始動する重要な一年であったことがうかがえる。

2014 年度

初年度に開設されたウェブサイトは、当年度から英語版も加わり、全世界に本研究拠点事業の情報提供を行なっており評価できる。学外から募集する共同研究（公募研究）が始まり、テーマ研究 5 本、公募研究 3 本、計 8 本の研究課題が採択された。公募研究には 7 本の応募があり、関心の高さがうかがわれる。特に中堅、若手研究者に活躍の場を与えようという配慮がなされており、若手研究者の研究プロジェクトが採択されたことは喜ばしい。また各年度の研究成果を紙媒体で報告するアニュアルレポート（英語版はウェブで公開予定）を毎年 1 号発行し、無料で配布しており、本事業が広く開かれた事業であることが示されている。

テーマ研究、公募研究とも大半が 8 ヶ月ないしは 9 ヶ月にわたってなされたものであり、研究会も数多く開かれ、着実に成果をあげている。ただ研究会については非公開のものも多くあり、できれば公開を原則として行なっていただきたい。テーマ研究Ⅰの「『繻子の靴』の上演のための実践的研究」は本事業にとって重要なプロジェクトであるが、テーマ研究Ⅲの第 1 回から第 7 回までの研究会が『繻子の靴』の上演（劇場実験）に関するものであり重複しているという印象は否めない。研究テーマの独自性という点では配慮が必要だろう。

2015 年度

テーマ研究を 4 本に再編し、公募研究はもっとも先端的な研究成果が期待できる 3 本を採択し、計 7 本で行なわれた。なお公募研究には 12 本の応募があり、本事業の注目度がますますアップしていることがわかる。運営委員会で論議になった、「不採用者へ不採用の理由を開示すべきではないか」という点についてだが、「必要なし」という結論で問題はないと思う。ただ科学研究費の審査などと同様にどのような項目（独創性、実現性、総合評価）を評価基準にしているのか、どのように評点が与えられているかは明らかにする必要があり、応募者から請求があった場合は評点の開示もすべきではないかと考える。

テーマ研究Ⅳの「アジアにおける演劇教育」は舞台芸術学科の教育とも密接に結びついており重要なプロジェクトなのだが、まだネットワークも狭く、交流できる地域、大学は限られている。今後は中国、インドなどにも研究対象を広げていってほしい。公募研究が学外の劇団の上演と結びつく場合には、プロジェクトの独自性をはっきり示す必要があり、ある程度のルール作りをすべきだと思われる。若手研究者の活躍も特筆すべきだが、「想起の空間」のプロジェクト要旨は難解である。

もともとはアスマンが書いた「ホロコーストの文化的記憶」をめぐる著作のタイトルで、古典的な（言い方を変えれば、「使い古された」）概念なのだが、それが「劇場の記憶・想起」とどう結びつくのかは最後までわからなかった。審査の過程でも同様の意見が出たようだが、申請書に対して、提出の段階である程度の変更を要求することも考慮すべきだろう。

3. 事業全体についての総合所見

評者が演劇の現場と密接に関わり始めたのは1980年代の初頭だが、舞台表現者（俳優や演出家）と研究者の仲は常に悪かった。「現場を知らない、頭の固い研究者が何を偉そうなことを言っているのだ」と演出家や俳優が言えば、「台本もきちんと理解できていなくて、何が芝居だ」と教授が言い返す。こんな場面によく出会った。演劇学という学問分野が日本でもしだいに確立されていったが、こうした状況はなかなか変わらなかった。京都造形芸術大学が目指す本研究拠点事業は、舞台芸術研究と舞台芸術作品の創造との連携を、劇場というラボを通して実践するという意欲的な試みである。大学内には京都芸術劇場（春秋座とstudio21）という本格的な劇場施設があり、本事業を推進する格好の条件となっている。

演劇について言えば、送り手（作者）と受け手（読者、観客）の間に伝播者である表現者（演出家、俳優など）が介在することで、演劇はさまざまに変容していく。文字化されたテクストの解釈・分析に留まらない研究が必要なのは言うまでもない。本事業では言葉の専門家、文学・演劇研究者だけではなく身体、演技、美術、衣装、照明、音響などさまざまな分野の専門家、アーティストが集まり、劇場という「実験室」で上演のための論議と「実験」を重ねてきた。文字どおり研究者とアーティストが一体となり、劇場を「創造の拠点」「総合的な芸術の拠点」にする画期的な試みであり、高く評価できる。また研究プロジェクトの終了後に、4本の本格的な舞台芸術作品が生み出されたことは、プロジェクトの有効性を検証する上で重要である。平成28年の12月には、本研究拠点事業の重要な柱である「『繻子の靴』上演のための実践的研究」プロジェクトの成果として、クローデルの『繻子の靴』の上演がなされる。8時間半に及ぶ本邦初演で、期待が高まる。

結果（上演）ばかりが目だってしまうが、本事業において重要なのはプロセス（ラボラトリー機能）であって、若手研究者、芸術家の養成や、研究プロジェクトへの舞台芸術学科の学生や卒業生の参加も重要課題である。その意味で渡邊が、卒業生で俳優や舞踊家を志す若手や衣装デザイナーを意図的に登用していることはすばらしいことだと思う。

4. 期待される将来の展開

「ラボラトリー機能」（調査・研究、シンポジウムや試演など）と「ファクトリー機能」（ラボで練られた「作品」完成後の上演）を結びつけるためにはどうしても財政的な裏づけが必要なため、助成金の獲得は必要不可欠である。3年間の実績をアピールして助成を受けてほしい。すでに萌芽的に始まっている学会（日本演劇学会など）との共同作業も重要で、京都国際舞台芸術祭などとの連携が深まれば、本研究事業はもっと多くの成果が期待でき、日本の演劇研究などに強烈なインパクトを与えることになるだろう。

京都芸術劇場が大学の所有であることは他大学には見られない有利な条件で、この施設を使って今後もさまざまな演劇的実験を行なうことが可能である。ただ大学の授業や公演などで劇場が使えない日も多く、劇場の使用に関してはかなり以前から日程調整をし、研究プロジェクトに十分活用できるようにしてほしい。まだ国際的な交流、ネットワークは弱いと思われるので、欧米を含めて舞台芸術の先進国とのつながりが深まれば、事業の幅ももっと広くなり、成果は上がるだろう。

もう一度原点に返り、ラボラトリー機能充実のために講演会やシンポジウムの回数を増やしたり、学生の教育にプロジェクトの成果を還元したりしながら3年間の総括をしてほしい。同時に演劇人、舞踊家、音楽家などが相互交流を深め、日本の舞台芸術に欠けている総合的な芸術の創造へと立ち向かってほしい。そのための条件は十分に整備されていると考える。

青山学院大学特任教授／東京大学名誉教授　**小林 康夫**

1. 組織、運営体制

わが国で唯一と言っていい、大学内に、多目的パフォーマンス・スペース（studio21）だけではなく、歌舞伎上演も可能な本格的な劇場（春秋座）までをもっている当舞台芸術研究センターを、当該大学の枠を超えた外部研究者にも開くことで、舞台芸術について、現場の創造性と深くリンクした実践的な研究を行おうという本事業は、ここでしかできないユニークな「特色」をもつものである。だが、それを行うためには、すでにある劇場と大学という二重性に加えて、大学内の研究実践と共同研究実践との二重性をマネージメントしなければならないというきわめて大きな困難を抱え込まなければならない。

このためには、組織運営上、

第1に、事務ならびに研究両次元における、センター所長（拠点リーダー）の強力なイニシアティヴ

第2に、（それとは逆に）外部の人間の意見評価もきちんと反映される運営組織の二重の補完体制が必須であろう。この視点から本プロジェクトの運営を見るならば、前所長の渡邊守章氏から現所長の天野文雄氏へのリーダーシップの移動はきわめてスムースに行われており、両者とも事務と研究そして演劇実践の各次元において責任ある強いリーダーシップを発揮している。またプロジェクトの活動を支える事務局の運営も機能的に、しかも多大の熱意をもって行われていることが確認される。同時に、半数以上の外部委員を含む構成が配慮されている運営委員会も、定期的（年3～4回）に開催され、そこでは実質的な審議がなされていることが確認される。

大学内の劇場運営という前代未聞の難しさを抱える当センターではあるが、それにかかわる多くの人たちの熱意によって、試行錯誤を重ねながらも、共同研究拠点として着実に運営組織の「整備」を実行していると評価できよう。

2. 事業内容（年度別）

2013年度

初年度であり、準備試行期間と位置づけられよう。この条件のもとでは、事業の二つの柱のひとつである「公募研究」に関しては、次年度に向けての公募を行うことにとどまるのはやむをえない。しかし、もうひとつの柱である「テーマ研究」において、学外、国外からも研究者を招いて、「語り」あるいは「照明技法」などについて、実演つきの講演会シンポジウムなどの研究企画を連続して行っていることは評価できる。とりわけ、「テーマ研究Ⅰ」の「近代日本語における〈声〉と〈語り〉」は、現場の演出家、能楽師や狂言方、俳優から作家、詩人、研究者、さらには海外の研究者など多様なゲストを招聘することで「声」という問題を劇場舞台に即して掘り下げるという新しい研究の

方法を実践した。他方、それ以外の「研究テーマ」は、劇場における照明や音などの問題、さらにはマルチメディア的方向性を実験的に試行する実践研究を遂行し、その活動は、年度末に、春秋座における「能ジャンクション『葵上』」ならびに「マルチメディア・パフォーマンス『二重の影』」の一般上演にもつながっている。この上演の質は高く、社会的にも注目を集めた。研究と作品創造の両極に橋をかけるという当拠点の研究活動の方向性が明確に打ち出されたと評価できよう。

2014 年度

拠点リーダーの交替があったが、前年度を引き継いで、本格的な活動が展開された年である。「テーマ研究」は５本と増えて、とりわけコンテンポラリーダンスの創造性を追求する実践的研究（「テーマ研究Ⅱ」）がはじまったのは興味深い。しかもこの研究は、日韓の共同研究という特色をもち、国際的な協同という地平を開くものでもあるように思われる。また、前年度の「テーマ研究Ⅰ」、の成果を受け継ぐ形で、「声と語り」の問題が、クローデル『繻子の靴』という長大で困難な、特異な作品に即して集中的に掘り下げられた。そして、その作品を、前年度の「テーマ研究Ⅲ」の成果を引き継ぎついだ、マルチメディアを駆使した舞台で上演するという明確に「創造」を目指した実践的研究が展開された。さらには、アジアの大学における演劇教育の連携を目指す「テーマ研究Ⅴ」などもあり、活動は、多様な次元への広がりを見せている。すなわち、深化と多様化という二つの運動がはっきりと浮上してきている。「公募研究」も、ダンスと老いを結びつけるきわめてユニークな活動や、LED 照明の実践的研究、「想起」という視点から劇場空間を捉え直そうとする理論的活動など、他では見られないようなオリジナルな研究が採用された。また、９月からは、劇場内に拠点事務局の専用スペースが設けられ、学外の研究者が活動しやすい環境が整えられた。

2015 年度

「テーマ研究」４本、「公募研究」３本が並び、「スタートアップ事業」の最終年らしく整備が完了したと言ってよい。「テーマ研究Ⅰ」は、前年度に引き続いてクローデル『繻子の靴』上演のための実践的な活動が続けられ、本年（2016 年）に春秋座において一般公演が行われる最終段階にまで達した。また、前年度の「テーマ研究Ⅲ」の「コンテンポラリーダンスの創造性と方法論をめぐる実践的研究」は、日韓共同ダンス作品「原色衝動」として実践的な上演（京都･春秋座､東京･世田谷パブリックシアター）にまで至った。「ラボラトリー」と「ファクトリー」の両面を橋渡しするという目標が現実化し、具体的な成果をあげていく時期に入ったことがうかがわれる。「テーマ研究」のどれもマルチメディアの現代性と伝統的な劇場空間を結びつけることでどのように新しい舞台芸術をつくるかという問題に正面から取り組んでいることが評価される。また「公募研究」についても、ダンスを通して「障害者との共生」という問題と向い合う画期的な試み、あるいはマヤコフスキーという詩人の仕事から出発して新しい演劇言語を開発しようという試みなど、他では見ることのできない新しい実験が行われている。

3. 事業全体についての総合所見

資金的にも人的にも膨大なエネルギーを必要とする劇場運営という場において、このプログラムが掲げる「ラボラトリー」機能と「ファクトリー」機能という性質の異なる二つの軸を結びつけつつ、新しい共同研究拠点を形成するという当初の目的は、この３年間の活動を通じて、その可能性の基礎が築かれたと言える。ここでの特徴は、いわゆる研究論文だけではない、実践的な成果発表として、一般公開に耐える作品上演へ至る道筋がはっきりと打ち出されたことである。劇場スペースを利用するということは、あくまでも社会に対してその成果を公表するということであり、そのような実践的研究というこれまでわが国の人文科学の分野ではあまり例をみなかった展開が試行され、それが大きな成果を挙げつつあると評価できる。さらに、このプログラムが「公募研究」という形で学外の研究者にも場を与えており、さらには国外の研究者との共同研究・共同事業にも開かれていることは重要である。また、特に３年目の活動に顕著に現れているが、若手研究者・演劇関係者を支援する方向が打ち出されはじめていることを評価したい。「劇団」をつくるわけではなく、あくまでも大学という研究の場で、しかし上演という社会性をもった成果発表をどのように行うかという、原理的にかなり難しい事業活動が実際に可能であるということを証明することに成功していると思われる。

以上、「スタートアップ事業」としては、当初の目的を十分に達成したと評価できる。

4. 期待される将来の展開

次の課題は、「スタートアップ」を踏まえて、より持続可能な運営を構築することであろう。すでに国内外の研究者関係者にその存在が認知された以上、実験的試行から一歩すすめて、継続的な「拠点」として比較的長期にわたって、機能することが決定的に重要である。そのための資金的な裏付けをどのように保証するかが最大の問題となる。その点がクリアーされたとすれば、本拠点がこれまで進めてきた、とりわけ異なるジャンルを横断し、総合するような、マルチメディア的な新しい舞台芸術の創造に向けて、よりいっそうの深化、多様化が推進されることが望ましい。そして、その活動が、海外との国際連携、そして若手研究者・演劇関係者の創造表現の「拠点」として機能することが期待される。舞台芸術の創造は長い準備の時間を必要とするが、たとえば海外の中堅アーティストを招聘して、日本の若手とともに、日本から世界に向けて発信するような作品創造が生まれることなどを夢みたいと思う。そのためには、資金問題、さらにはレジデンス機能の整備ほか克服しなければならない問題も多いが、今回の「スタートアップ」を踏まえて、日本における、いや、世界における演劇研究拠点としてさらにグレード・アップした展開が行われることが期待される。

公益財団法人セゾン文化財団 プログラム・ディレクター　久野 敦子

1. 組織、運営体制

1. 「舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点」として、大学施設および資源を活用し、教員、卒業生、学生、外部研究者、芸術家、観客間のかかわりのもと、プロジェクト全体を有機的かつ整合性をもって動かすための効果的な運営体制を組織している。
2. 運営委員会との会議が定期的に実施され、本プログラムの運営について適切な報告、相談、意見交換がなされている。
3. 幅広い分野から識者を招いている特色を活かし、プログラム運営についてのコメントに留まらず、事務局の意図する「研究者コミュニティや劇場・舞台芸術フェスティバル等の最新の動向を絶えず反映させる」機会になる、より活発な意見の場にもなることを、さらに期待する。
4. 評価の際に、宣伝、広報計画およびそれらの成果を示す効果測定があると、本プロジェクトのターゲットと普及にお

ける遡及効果を図ることができるのではないか。
5. 会計監査役が組織表に組み込まれていないのが気になる。会計担当は事務局長が兼任しているので監査として別人物が必要なのではないか。

2. 事業内容（年度別）

2013 年度

1. 平成 25 年度は、本事業の初年度にあたるため、事業開始前の準備として他大学の先行事例に丁寧にあたり、参考となる仕組みや方法を積極的に導入し、限定された時間にも関わらず、効果的な運営体制基盤の構築から募集要項の策定、告知まで今後の基盤になる枠組みを速やかに策定することができた。
2. 公募プログラムから開始するのではなく、学内研究者を中心とした「テーマ研究課題」の実施から開始したことは、本プログラムの今後の目標を初年度に示すパイロットケースとして効果的だったのではないか。
3. また、事業内容も本プログラムの特色となる劇場での実験とレクチャー、シンポジウム、公開 / 非公開の講座を組み合わせ、「劇場を用いた研究」手法の公開、普及を意識したものになっている。
4. アンケートを見た限りにおいては、観客が公開講義について高い関心を持っていることは窺えたが、一部の公開研究会では参加年齢に大きな偏りが見られる。また、開始初年度ということもあり、まだ受動的な様子である。
5. 複数年継続研究も可能ということで、初年度から大きなテーマ設定へのチャレンジが可能となっている。

2014 年度

1. 平成 26 年度は、公募研究のプロジェクトが 3 本加わり、多様な出自の参加研究者によるバラエティに富んだ内容の研究が実現できた。
2. それに伴い、協力関係を結ぶ外部組織も増え、京都以外の地域でも関連事業が開催された。成果の共有のみならず、本プロジェクトをめぐるネットワークおよび本事業の認知度が 2 年度目にして一気に拡大した印象を受ける。
3. また、劇場では実現が困難と思われる重要な作品が、一般観客に向けて無料で公開できたことも大きな成果と言える。
4. 継続事業を採択したことで、2013 年度の事業の成果を活かしつつ、さらにテーマを深化させた研究が実現できた。
5. 一方で、単年度事業で終了した事業の内容に関わる報告が web 上に掲載されていないものが多いのは残念。

2015 年度

1. 平成 27 年度は、さらに事業の躍進が認められた。さらに多様な領域からのテーマと方法に取り組み、多彩な人材を本事業に招き入れることができた。特に外部からの公募によって採択された研究内容が興味深い。
2. 学内からのテーマ研究についても、継続案件は 3 年目を迎え 2 年間の研究と実験の成果が形となって現れた。また、単年度研究についても研究から実践の場に続く作業が行われ、「研究が舞台芸術の創造の場に接続する」良い研究事例となった。
3. ほとんどの研究については、詳細な報告が研究代表者によってなされている点も評価に値する。が、報告が web 上で見つからないものも多く、報告概要を研究センターの web に統一フォーマットで一律に掲載できる仕組みが必要なのではないか。
4. 本事業の上演作品に関心を持つ観客が、研究報告にアクセスすることにより、深く作品を知ることができ、成果が一般にも活かされる結果になっているのは成果のひとつである。

3. 事業全体についての総合所見

1. 年度を追う毎に、研究テーマの充実が図られ、当初の目的である「劇場を用いた研究」という新たな研究手法は、新しい分野を開拓しようとする研究者たちに良く知られるところとなった。
2. 3 年間を通じていくつかの良い事例が発生しているので、今後、大学側から具体な事例を用いて、本事業の提案する方法、視点の導入を普及、提示していくことが可能となった。
3. 事業の実施を通して、新たな人材の発見、参画を実現することができた。さらに横の連携を深めるための場を設定しても良いのではないか。
4. 中長期的な目標として共同研究を国際的に開かれた形で実施するという点については、達成するには 3 年の実施期間では短く、次期に期待したい。その準備として、英語による情報発信に取り組むべき。
5. 継続研究の「アジアの大学における演劇教育」実践に向けては、アジアにおける舞台芸術系の大学の多くが関心をよせるテーマであり教育機関こそが継続して取り組むべきテーマなので、俳優教育のみならず、幅広い視点から演劇教育に関する研究を進め教育現場での実践に繋がることを期待する。
6. 研究会の事前告知は統一フォーマットで web 上で公開されているのだが、事業終了後の報告が見えにくい。報告についても、統一フォーマットで何が行われどのような成果があったのかがわかる記述、および、外部に詳細な報告がある場合にはそこに繋がるリンクを示すとよい。すでに充実した報告ページを持つ研究もあるのだが、全くないものもあり、成果報告のレベルが揃っていない。
7. 研究内容および成果の報告は必須。報告には、数字だけではない評価　問題の立て方、思考のプロセス、実践に移す際の課題、研究と実践による取り組みによって見えてきた事など、舞台芸術関係者にも理解できるレベルでの報告が必要。公開することで研究者と実践者、延いては観客とも情報共有できる場となることが、3 年間の事例で明らかになった。

4. 期待される将来の展開

この 3 年間「舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究」をテーマとする研究で、劇場を効果的に活用し、「創造の現場」と「学術研究」を結びつける新たな方法を導入する試みは、いくつかの興味深い事例を誕生させることで一定の目的を達成した。と同時に、本事業の目指す研究者と実践家の協働が、より豊かな舞台芸術作品の創出および理解を創出することも明らかになった。本事業を一つの契機として、特に以下の点において将来の展開を期待している。

1. 領域横断的、実践的研究事例の実施および蓄積
2. 国際的共同研究の取り組み、英語での情報発信
3. 研究者と舞台芸術実践者たちとの領域横断的なコミュニティの創出
4. 研究者、舞台芸術実践者、観客との成果の共有

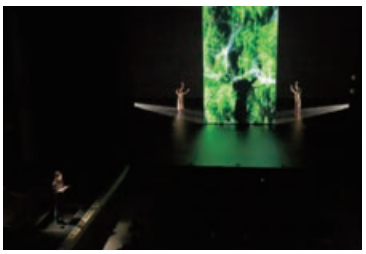
本研究拠点の研究成果に基づいた作品上演

本研究拠点は、「大学の劇場」を活用した〈創造のための研究〉を目的としており、芸術家と研究者によるさまざまな共同研究の終了後に、そこでの研究成果が基盤となった実際の舞台作品の創造が実現することは、まさに本研究拠点の設立趣旨にかなうところです。本欄では、2013 年度から 16 年度にかけて、文科省「スタートアップ支援事業」を通じて行われた研究成果が、実際の作品化に結びついた 6 作品を紹介します。

2013 ～ 2015 年度

能ジャンクション『葵上』／マルチメディア・パフォーマンス『二重の影』

（舞台芸術研究センター主催公演／平成 25 年度 文化庁 大学を活用した文化芸術推進事業）



撮影：清水俊洋

【公演日】2014 年 3 月 29 日（土）～ 30 日（日）
【会場】京都芸術劇場　春秋座
【キャスト】能ジャンクション『葵上』 観世銕之丞、片山九郎右衛門、茂山童司
音楽：湯浅譲二 『葵の上』ミュジーク・コンクレート（1961 年）
マルチメディア・パフォーマンス『二重の影』／ダンス：白井剛、寺田みさこ／語り：茂山童司／笙：東野珠実／朗読：後藤加代、渡邊守章
【スタッフ】構成・台本・演出：渡邊守章／映像・美術：高谷史郎／舞台監督：大鹿展明／演出助手：木ノ下裕一／音楽：原摩利彦／音響：齋藤学／音響設計：鶴林万平／照明チーフ：岩村原太／メディア・オーサリング：古舘健／映像技術：桜木美幸、竹崎博人／衣裳：清川敦子／制作：川原美保／制作助手：岩﨑小枝子
【観客総数】381 名

《母体となった共同利用・共同研究プロジェクト》
2013 年度 テーマ研究Ⅲ〈マルチメディアシアターの再定義〉をめぐる実践的研究／研究代表：渡邊守章

『ゼロ・アワー：東京ローズ最後のテープ』

（舞台芸術研究センター主催公演／平成 27 年度 文化庁 大学を活用した文化芸術推進事業）

撮影：清水俊洋

【公演日】2015 年 7 月 18 日（土）～ 19 日（日）
【会場】京都芸術劇場　春秋座
【キャスト】
荒尾日南子、小林亜美、西村壮悟、松崎颯、明季、益田さち、松本芽紅見
【スタッフ】
作・演出・美術：やなぎみわ／振付：松本芽紅見／舞台監督：浜村修司／舞台監督補：武吉浩二／音響：小早川保隆／照明：池辺茜／映像制作：三谷正／映像操作：中村敬亮／字幕操作：黒飛忠紀／小道具制作：黒飛忠紀、許品祥／衣裳デザイン・制作：朝倉夕加里／宣伝美術・制作協力：木村三晴／翻訳：マチダゲン／装置デザイン：トラフ建築設計事務所／チェス棋譜制作：若島正／演出助手：山﨑なし／制作：井上美葉子
【観客総数】487 名

《母体となった共同利用・共同研究プロジェクト》
2014 年度 テーマ研究Ⅲ　〈マルチメディアシアターの再定義〉をめぐる実践的研究／研究代表：森山直人

『原色衝動』

（舞台芸術研究センター主催公演／平成 27 年度 文化庁 大学を活用した文化芸術推進事業）

撮影：清水俊洋

【公演日】2015 年 9 月 26 日（土）～ 27 日（日）［京都］、2016 年 2 月 26 日（金）～ 27 日（土）［東京］
【会場】京都芸術劇場　春秋座、世田谷パブリックシアター
【キャスト・スタッフ】
振付・構成・出演：白井剛、キム・ソンヨン／映像写真：荒木経惟／舞台美術：杉山至／舞台監督：大鹿展明／映像設計・技術：山田晋平／照明：岩村原太、吉田一弥／音響・サウンドデザイン：大久保歩／音楽：原摩利彦／衣装：清川敦子／アシスタントダンサー：今村達紀／撮影衣装提供：TAU ／宣伝写真：荒木経惟／宣伝デザイン：AD：榎本了壱＋ D：蛭田恵実／構想・コーディネート：山田せつ子／制作：［京都］川原美保、和田ながら、［東京］三上さおり、酒井淳美／通訳・翻訳：木村典子、平木杏梨
【観客総数】355 名

《母体となった共同利用・共同研究プロジェクト》
2014 年度　テーマ研究Ⅱ　コンテンポラリーダンスの創造と方法論をめぐる実践的研究／研究代表：山田せつ子

『ミステリヤ・ブッフ』

（フェスティバル / トーキョー 15 公式プログラム）

撮影：山西崇文

【公演日】2015 年 11 月 20 日（金）～ 28 日（土）
【会場】にしすがも創造舎（東京都）
【 作 】ヴラジーミル・マヤコフスキー
【翻訳】小笠原豊樹
【演出】三浦基
【キャスト】
安部聡子、石田大、小河原康二、窪田史恵、河野早紀、小林洋平
【スタッフ】
舞台美術：杉山至／衣裳：堂本教子／音響：西川文章／照明：藤原康弘／舞台監督：足立充章／舞台監督助手：吉見祐司／宣伝美術：松本久木／制作：小森あや、田嶋結菜、三竿文乃、喜友名織江
【観客総数】1,664 名

《母体となった共同利用・共同研究プロジェクト》
2015 年度　公募研究Ⅱ　マヤコフスキー研究 ―詩人の仕事の解明と新しい演劇言語の開発／研究代表：三浦基

2016 年度

『三人の女』

（あいちトリエンナーレ 2016 公式プログラム）

撮影：菊山義浩

【公演日】2016 年 8 月 30 日（火）～ 31 日（水）
【会場】愛知県芸術劇場　小ホール
【キャスト】
映像出演：石倉直実、田中志朋、宝来麻耶
【スタッフ】
舞台構成・演出・監督・構想・撮影・編集：伊藤高志／音響構成：荒木優光／撮影協力：米倉伸／実験映画撮影：ジョン・ピロン／舞台監督：浜村修司／映像技術：浜田俊輔、脇原大輔／照明：藤原康弘／音響：小早川保隆／制作：中山佐代、村松里実
【主催】あいちトリエンナーレ実行委員会
【観客総数】459 名

《母体となった共同利用・共同研究プロジェクト》
2015 年度　公募研究Ⅲ　想起の空間としての劇場／研究代表：横堀応彦

『繻子の靴』

（舞台芸術研究センター主催公演）

【公演日】2016 年 12 月 10 日（土）～ 11 日（日）
【会場】京都芸術劇場　春秋座
【キャスト】
剣幸／吉見一豊、石井英明、阿部一徳、小田豊、瑞木健太郎、／茂山七五三、茂山宗彦、茂山逸平、島田洋海、鈴木実／岩澤侑生子、岩﨑小枝子、鶴坂奈央、千代花奈、田中沙依、片山将磨、山本善之、磯見優志、谷田真緒／藤田六郎兵衛（能管）／野村萬斎（映像出演）
【スタッフ】
翻訳・構成・演出：渡邊守章／映像・美術：高谷史郎／照明：服部基／演出助手：木ノ下裕一、岩﨑小枝子／映像プログラミング：濱哲史、古舘健、白木良／映像技術：三谷正／音楽：原摩利彦／音響操作：宮田充規／舞台監督：夏目雅也、大鹿展明／衣装：萩野緑／技術監督：小坂部恵次／制作：川原美保、堂岡佐和子

《母体となった共同利用・共同研究プロジェクト》
2013 年度　テーマ研究Ⅰ　近代日本語における〈声〉と〈語り〉／研究代表：渡邊守章
2014 年度　テーマ研究Ⅰ　クローデル『繻子の靴』上演のための実践的研究／研究代表：渡邊守章

Annual Report

拠点ホームページ

日本語：http://www.k-pac.org/kyoten/
英　語：http://www.k-pac.org/kyoten/en/

京都芸術劇場　検索　共同利用・共同研究のバナーをクリック

※公募のご案内に関しては、公式ウェブページをご覧ください。

舞台芸術研究センター機関誌『舞台芸術』

2002 年より刊行しております舞台芸術研究センター機関誌『舞台芸術』は、京都芸術劇場で行われる舞台芸術研究センター主催の実験公演や研究活動を報告する場であり、そのプロセスを公開する場でもあります。各号ごとに特集を設け、古今東西のパフォーミング・アーツを今日的な視点で切り取り、21 世紀における舞台芸術の新たな可能性について考察します。

次回予告　『舞台芸術』20 号

特集〈2020 年以降〉
　　―舞台芸術は生き残ることができるか

■インタビュー：「文化立国」という展望をめぐって
　青柳正規　聞き手：編集部

■対談：渡辺保×渡邊守章「伝統芸術」の行方

■座談会 1「芸術系大学」は、今後なにを切り拓くことができるか
　鷲田清一（京都市立芸術大学学長）×建畠哲（多摩美術大学学長 / 京都芸術センター館長）×やなぎみわ（美術家、演出家 / 京都造形芸術大学教授）

■座談会 2 都市と地方の創造環境―〈2020 年以降〉を見据えてなされるべきこと
　内野儀（東京大学大学院教授）×片山正夫（セゾン文化財団常務理事）×長島確（ドラマトゥルク）×相馬千秋（アートプロデューサー）

■座談会 3 舞台芸術における〈技術〉はこれからいかに変容していくのか
　服部基（舞台照明家）×堀内真人（プロダクションマネージャー）×杉山至（舞台美術家）×中屋敷法仁（劇作家・演出家）

バックナンバーもご購入いただけます。

詳しくは、京都芸術劇場ＨＰをご覧ください。
http://k-pac.org/book/

最新号「舞台芸術」19 号

＜京都＞からの発信／
アートマネジメントの現在地から　1500 円（税別）

発行／編集
京都造形芸術大学
共同利用・共同研究拠点事務局（舞台芸術研究センター内）
〒606-8271　京都市左京区北白川瓜生山2-116　京都造形芸術大学内
TEL. 075-791-9144（平日10時～17時）

拠点へのアクセス

■JR・近鉄京都駅、京阪三条駅、阪急河原町駅から京都市バス5番「岩倉」行き乗車、「上終町・京都造形芸大前」下車（京都駅から約50分、三条駅・河原町駅から約30分）
■京都市営地下鉄丸太町駅・北大路駅から（約15分）京都市バス204循環に乗車、「上終町・京都造形芸大前」下車
■京阪電車出町柳駅から叡山電車に乗り換え、茶山駅下車（徒歩約10分）

※駐車場はございませんので、車・バイクでのご来学はお控えください。

京都造形芸術大学
共同利用　共同研究
2013 – 2018

事務局　竹宮華美、塚本玲奈
黒岩浩美、四ヶ浦香、桑原綾子

表紙写真：京都芸術劇場 春秋座